河内長野市遺跡調査会報XIX

上　原　遺　跡
塚　穴　古　墳

上原土地区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９８年３月

河内長野市遺跡調査会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、市域を高野街道をはじめとする街道が通り、南河内における交通の要衝として発展してきた街です。このため、市内には金剛寺、観心寺などの寺社に代表される重要文化財や多くの埋蔵文化財が残されています。

このような河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、近年になって住宅都市として急速に開発が進んでいます。

開発がもたらす影響は自然や文化財には大きなものです。とくに埋蔵文化財にとっては直接的に関わる大きな問題です。

開発を必要とすると同時に、失われていく遺跡に託された先人達のメッセージを現在の市民、さらには未来の市民へと伝えていかなければなりません。

本書は河内長野市に所在する遺跡の発掘調査の成果を収録しています。先人達が残したメッセージの一部でも感じていただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深い御理解に末尾ながら謝意を表すものです。

河内長野市遺跡調査会
理事長　中　尾　謙　二

例　　言

1．本報告書は平成７年度から平成９年度にかけて河内長野市遺跡調査会が河内長野市上原土地区画整理組合から委託を受けた上原遺跡（ＵＨＲ97－１）及び塚穴古墳（ＴＡＫ95－１・96－１）の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は河内長野市上原土地区画整理組合が負担した。

2．調査は河内長野市教育委員会教育部社会教育課文化財保護係主査尾谷雅彦・同係鳥羽正剛・同係嘱託中尾智行（現㈶大阪府文化財調査研究センター）を担当者として実施し、内業調査については河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子が補佐した。

3．調査にかかる事務は河内長野市遺跡調査会事務局長大塚幸男（本市教育委員会教育部社会教育課課長補佐兼務）が主担した。

4．本書の執筆・編集は鳥羽・中尾が行い、東田幸子（ふれあい考古館嘱託）がこれを補佐した。文責については、鳥羽が負うものである。

5．遺物及び遺構の一部の写真は中西が撮影した。

6．発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。（敬称略・順不同）

阿部園子・川島伸子・喜多順子・小森光・阪木しずこ・山田（重野）真紀・杉本祐子・高橋知佐子・田川富子・辻宏子・中村嘉彦・林和宏・藤井美佐子・枡本裕子・間瀬未明・松尾和代（現本市教育委員会嘱託）・牟田口京子・山上美幸・吉田麻子・ロビン＝キャンベル・ハザー＝ボイド・安井かをり・池田千尋・鳴川幸子・外山智美・山原浩介

7．発掘調査については下記の方々の指導・協力を得た。記して感謝する。（敬称略・順不同）

上原地区自治会・河内長野市上原土地区画整理組合・水野正好（奈良大学）・中村浩（大谷女子大学）・大谷女子大学考古学研究会・片山一道（京都大学）・松尾信裕（㈶大阪市文化財協会）・積山洋（同）・西山昌孝（千早赤阪村教育委員会）・粟田薫（富田林市教育委員会）・西田孝司（園田学園女子大学）・堀智範（天野山金剛寺）・桑原弘海（医王山福徳寺）・桑原法俊（同）・細原一義（金光山法華寺）・川崎一洸（高野山大学大学院生）・櫻井義則（河内長野市立加賀田中学校）・佐合芳三（本市教育委員会教育部学校教育課）・前野美加（同）・株式会社島田組・株式会社八州

8．本調査の記録はスライドフィルム等でも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高はＴＰを基準としている。

2．土色は『新版標準土色帖』による。

3．平面測量は国土座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施した。

4．図中の北は座標北である。

5．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＫ…土坑　ＳＬ…埋甕　ＳＰ…ピット　ＳＵ…石敷

6．遺構の実測図の縮尺は、1/20・1/50・1/60・1/80・1/120・1/200とした。

7．遺物の実測図の縮尺は、石器2/3、土器1/4・1/6、瓦1/4・1/6、石製品1/4・1/8、金属製品1/3、古銭原寸とした。

8．須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器の断面は黒塗り、縄文土器・弥生土器・土師質土器の断面は白抜き、瓦・鉄製品の断面は斜線である。

9．実測図の遺物番号と写真のそれは一致する。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次
付図目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　位置と環境…… 1
　第２節　調査に至る経過…… 4
第２章　調査の結果…… 7
　第１節　上原遺跡…… 7
　　1　概略…… 7
　　2　遺構と遺物…… 8
　第２節　塚穴古墳…… 11
　　1　概略…… 11
　　2　墳丘と石室…… 11
　　3　石室内第１遺構面…… 12
　　4　石室内第２遺構面…… 13
　　5　石室内第３遺構面…… 15
　　6　遺物…… 16
第３章　まとめ…… 37
　第１節　上原遺跡の調査結果…… 37
　第２節　塚穴古墳の調査結果…… 38

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）…… 2
第３図　調査地位置図（1/5000）…… 5

上原遺跡（ＵＨＲ９７－１）

第４図　遺構配置模式図（1/600）…… 7
第５図　ＳＢ１遺構実測図（1/80）…… 8
第６図　ＳＢ２遺構実測図（1/80）…… 8
第７図　ＳＫ２出土遺物実測図…… 9
第８図　ＳＰ１出土遺物実測図…… 9
第９図　包含層出土遺物実測図…… 10

塚穴古墳（ＴＡＫ９５－１・９６－１）

第10図　墳丘トレンチ配置図（1/400）…… 11
第11図　石室実測図（1/80）…… 12
第12図　第２遺構面遺構配置模式図（1/100）…… 13
第13図　ＳＬ１遺構実測図（1/20）…… 13
第14図　ＳＬ２～４遺構実測図（1/20）…… 14
第15図　墳丘周辺採集石造物実測図（１）…… 16
第16図　墳丘周辺採集石造物実測図（２）…… 17
第17図　墳丘周辺採集石造物実測図（３）…… 18
第18図　墳丘周辺採集石造物実測図（４）…… 19
第19図　ＳＬ１・２出土遺物実測図…… 20
第20図　ＳＬ３・４出土遺物実測図…… 21
第21図　上層包含層出土遺物実測図（１）…… 23
第22図　上層包含層出土遺物実測図（２）…… 24
第23図　下層包含層出土遺物実測図…… 25
第24図　石室内出土石造物実測図（１）…… 26
第25図　石室内出土石造物実測図（２）…… 27
第26図　石室内出土石造物実測図（３）…… 28
第27図　石室内出土石造物実測図（４）…… 29
第28図　石室内出土石造物実測図（５）…… 30
第29図　石造物細部名称図…… 31
第30図　墳丘平面図（1/120）及び土層断面実測図（1/60）…… 35・36
第31図　石室内遺構実測図（1/60）及び土層断面実測図（1/60）…… 35・36

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表…… 3
第２表　石造物計測表（別石宝篋印塔）…… 31
第３表　石造物計測表（別石五輪塔）…… 31
第４表　石造物計測表（一石宝篋印塔）…… 32
第５表　石造物計測表（一石五輪塔）…… 33
第６表　石造物計測表（基壇・板石）…… 34
第７表　石造物計測表（層塔）…… 34

図　版　目　次

図版１　遺構　上原遺跡　調査区全景（真上から）
図版２　遺構　上原遺跡　調査区全景（Ａから）、調査区全景（Ｂから）
図版３　遺構　上原遺跡　ＳＢ１・２（西から）、調査区全景（Ｃから）
図版４　遺構　塚穴古墳　全景（南から）、石室内部（開口部から）
図版５　遺構　塚穴古墳　石室内石造物出土状況、ＳＬ１・蜂巣石出土状況（南から）
図版６　遺構　塚穴古墳　ＳＬ２出土状況（南から）、ＳＬ３・４出土状況（南から）
図版７　遺構　塚穴古墳　ＳＵ１（東から）、石室開口部（南から）
図版８　遺物　上原遺跡　ＳＫ２（１）、ＳＰ１（２）、包含層（３～21）
　　塚穴古墳　墳丘周辺採集石造物（22・23・25）
図版９　遺物　塚穴古墳　墳丘周辺採集石造物（24・26～30）
図版10　遺物　塚穴古墳　墳丘周辺採集石造物（31～36）
図版11　遺物　塚穴古墳　墳丘周辺採集石造物（37～51・53）
図版12　遺物　塚穴古墳　ＳＬ１（54）、ＳＬ２（55・56）、ＳＬ３（57～60）
図版13　遺物　塚穴古墳　ＳＬ４（61～64・66）、上層包含層（67～79・81～89）
図版14　遺物　塚穴古墳　上層包含層（90～102・105～108）
図版15　遺物　塚穴古墳　下層包含層（109・110・112～114・116・122・131～141）
図版16　遺物　塚穴古墳　石室内出土石造物（146～153・160・162・163）
図版17　遺物　塚穴古墳　石室内出土石造物（154・164・165・167・169・171）
図版18　遺物　塚穴古墳　石室内出土石造物（142～145・155～159・166）

付　図　目　次

付図１　上原遺跡遺構全体図（1/200）及び土層断面実測図（1/50）

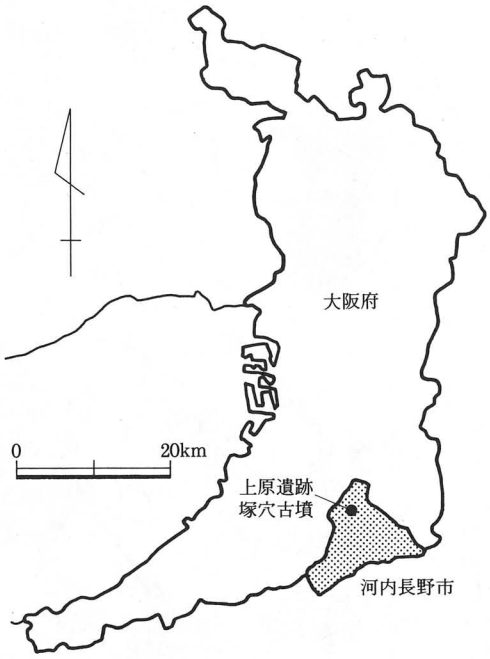
第１章　はじめに

第１節　位置と環境

上原遺跡は、河内長野市上原町に広がる旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。上原遺跡の東側には塚穴古墳が隣接する。

地理的環境としては、和泉葛城山系に水源をもつ石川の西岸の中位段丘上、標高約140mに位置する。上原遺跡の範囲は、東西約0.2㎞、南北約0.5㎞である。塚穴古墳は直径約15mの円墳、あるいは一辺約15mの方墳であると考えられている。

歴史的環境としては、北側0.35㎞の石川西岸の中位段丘から背後の丘陵にかけての斜面に伝「仲哀廟」古墳と上原近世瓦窯があり、同じく北側0.7㎞の丘陵上に住吉神社遺跡が位置している。



第１図　遺跡位置図

東を望むと、石川西岸の中位段丘上では0.1㎞に中世の散布地の上原東遺跡、0.15㎞に古墳時代と中世の散布地の上原中遺跡、0.3㎞に中世の集落跡の上原北遺跡、0.7㎞に中世の鍛冶遺跡である野作遺跡が位置している。石川西岸の低位段丘上では0.4㎞に弥生時代中期の散布地で中世の集落跡の錦町北遺跡が位置している。また、石川東岸の丘陵では0.7㎞に中世から近世にかけての山城で楠木正成の出城の一つと言われる烏帽子形城が位置している。

南を望むと、石川西岸の中位段丘上には0.1㎞に旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である高向遺跡、0.5㎞に中世の鎮壇具が出土した惣持寺跡、0.7㎞に中世の集落跡の高向南遺跡、0.9㎞に中世の高向神社遺跡が位置している。また、0.8㎞の中位段丘の西側斜面には上原近世墓が位置している。石川西岸の低位段丘上では0.7㎞に平安時代から中世の集落跡の宮の下遺跡があり、石川東岸の低位段丘上では0.9㎞に平安時代の集落跡の野間里遺跡、0.9㎞に縄文時代中期後半の集落跡でもあり奈良時代の和同開珎が出土した宮山遺跡が位置している。

西を望むと、石川西岸の小山田丘陵一帯に古代から近世にかけての炭焼窯である長池窯跡群が位置している。

第２図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺	社寺	
3	観心寺	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落	弥生（後期）
7	興禅寺	社寺	
8	烏帽子形八幡神社	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳	古墳（後期）
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺	社寺	
14	金剛寺	社寺	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺	中世
16	地蔵寺	社寺	
(17)	岩湧寺	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～中世
25	流谷八幡神社	社寺	中世以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	散布地	中世
30	岩瀬薬師寺	墳墓	近世
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
34	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳？	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	城館 散布地	江戸 飛鳥～奈良
44	上原町墓地	墳墓	
45	惣持寺跡	社寺	鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	
52	膳所藩陣屋跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地	縄文～中世
55	河合寺城跡	城館	
56	三日市遺跡	集落	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	室町
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	
(66)	葛城第15経塚	経塚	
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂	社寺	

番号	文化財名称	種類	時代
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	
(73)	葛城第18経塚	経塚	
(74)	葛城第19経塚	経塚	
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	
(78)	光滝寺	社寺	
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	
(81)	川上神社遺跡	社寺	
82	千代田神社遺跡	社寺	
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺	弥生・中世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚	墳墓	
(105)	葛城第17経塚	経塚	
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	集落	中世
108	寺元遺跡	集落	奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	中世
118	錦町北遺跡	散布地	弥生・中世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世
127	三昧城遺跡	墳墓・城館	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世

（　）は地図範囲外　＊は街道につき地図上にプロットせず

第1表　河内長野市遺跡地名表

第2節　調査に至る経過

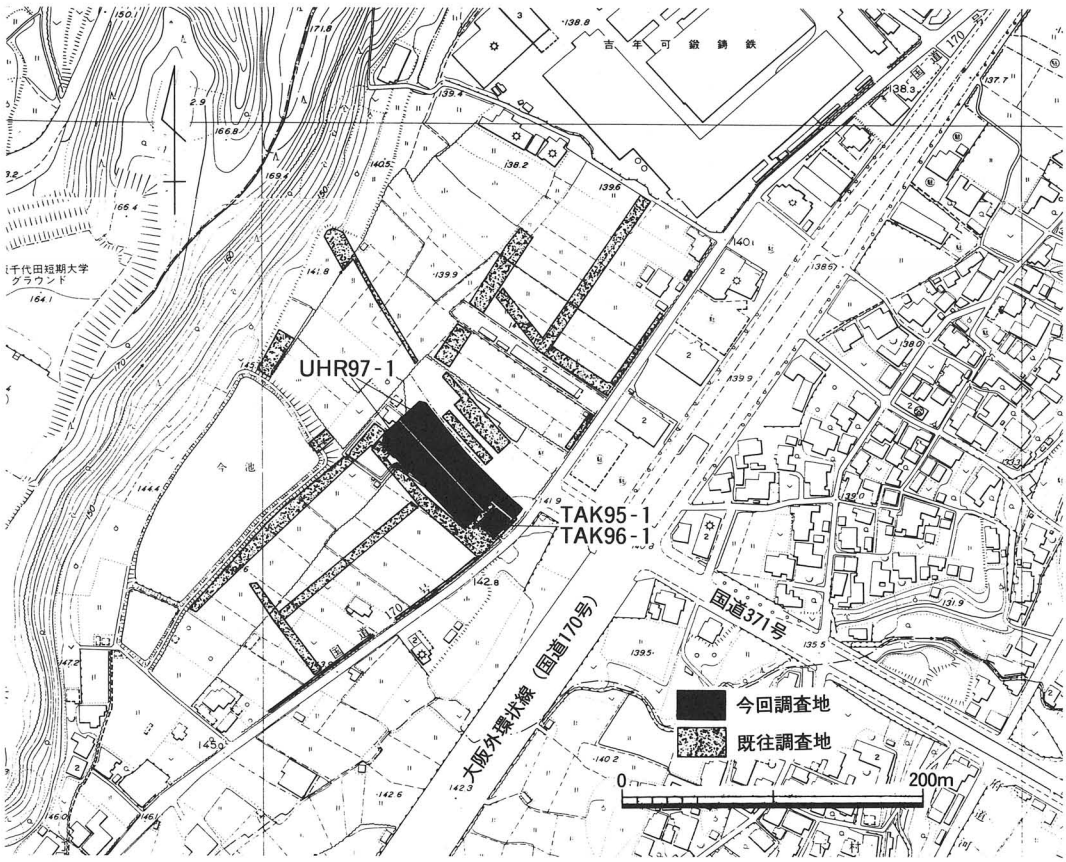
本書掲載の上原遺跡及び塚穴古墳の発掘調査は、河内長野市上原土地区画整理組合（以下、組合と略す）を事業主体とする土地区画整理のための宅地造成及び公園整備に先立つ事前調査として行われたものである。

昭和60年、河内長野市都市建設部（現在、建設部。以下、市都市建設部と略す）は河内長野市上原地区での区画整理事業を計画するにあたり、河内長野市教育委員会（以下、市教委と略す）と協議を行った。協議の結果、市教委は計画地内における埋蔵文化財の存在の有無を確認するために分布調査が必要であり、調査機関は財団法人大阪文化財センター（現在、財団法人大阪府文化財調査研究センター。以下、センターと略す）に委託するよう回答した。市都市建設部とセンターは昭和60年４月16日付で分布調査の契約を締結し、調査は同年４月17日から４月20日まで行われた。その結果、遺物の散布が認められ、集中する地点も判明した。(註1)

この結果を受けて市教委は工事の事前に遺跡の範囲確認調査が必要であることを市都市建設部に回答し、市都市建設部は市教委に調査を依頼した。調査は昭和61年２月24日から３月４日まで行われたが、分布調査で判明した遺物集中地点から試掘調査地が離れていたため、遺構や遺物はほとんど確認されなかった。(註2) しかし、塚穴古墳の周囲や調査の及ばなかった一部の地点については遺構の存在が考えられることから、発掘調査が必要であるとの結論に達した。

平成５年には市教委と組合が本調査に関する覚書を締結した。それに基づき、市教委の指導の下、上原遺跡第１・３～５調査区（ＵＨＲ93－１・94－１・94－２・94－３・95－１）は組合と河内長野市遺跡調査会（以下、調査会と略す）、第２調査区（ＵＨＲ94－２今池樋）は市都市建設部と調査会が委託契約を締結し、本調査を開始した。外業調査（発掘調査）は平成５年度は平成５年11月２日から平成６年３月15日、平成６年度は平成６年６月23日から平成７年３月24日、平成７年度は平成７年４月３日から平成８年３月15日にかけて実施した。内業調査は、平成７年４月３日から平成９年３月31日にかけて実施した。調査の結果、旧石器時代、縄文時代前期・後期、弥生時代、古墳時代後期、中世、近世の遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが改めて確認された。(註3)

さらに、平成７年度の外業調査終了後、宅地造成と公園整備の追加事業が計画決定され、上原遺跡と塚穴古墳の範囲において発掘調査が再度必要になった。上原遺跡については平成９年５月19日に組合と調査会が契約を締結し、外業調査を同年５月20日から９月９日にかけて実施した。塚穴古墳は平成７年度に上原遺跡第５調査区の調査の一環として、墳丘及び石室内の一部と開口部付近について調査を行っており（ＴＡＫ95－１）、今回は石室内のみ調査した（ＴＡＫ96－１）。平成８年７月１日に組合と調査会が契約を締結し、外



第３図　調査地位置図（1/5000）

業調査を同年７月１日から８月30日にかけて実施した。内業調査はそれぞれの外業調査時期に同時並行して、平成９年12月25日まで実施し、すべての業務を完了した。

（註１）『河内長野市上原地区　区画整理事業予定地内分布調査報告書』　財団法人大阪文化財センター　1985年

（註２）『上原遺跡試掘調査報告書』　河内長野市教育委員会　1986年

（註３）『河内長野市遺跡調査会報XV　上原遺跡』　河内長野市遺跡調査会　1997年

第２章　調査の結果

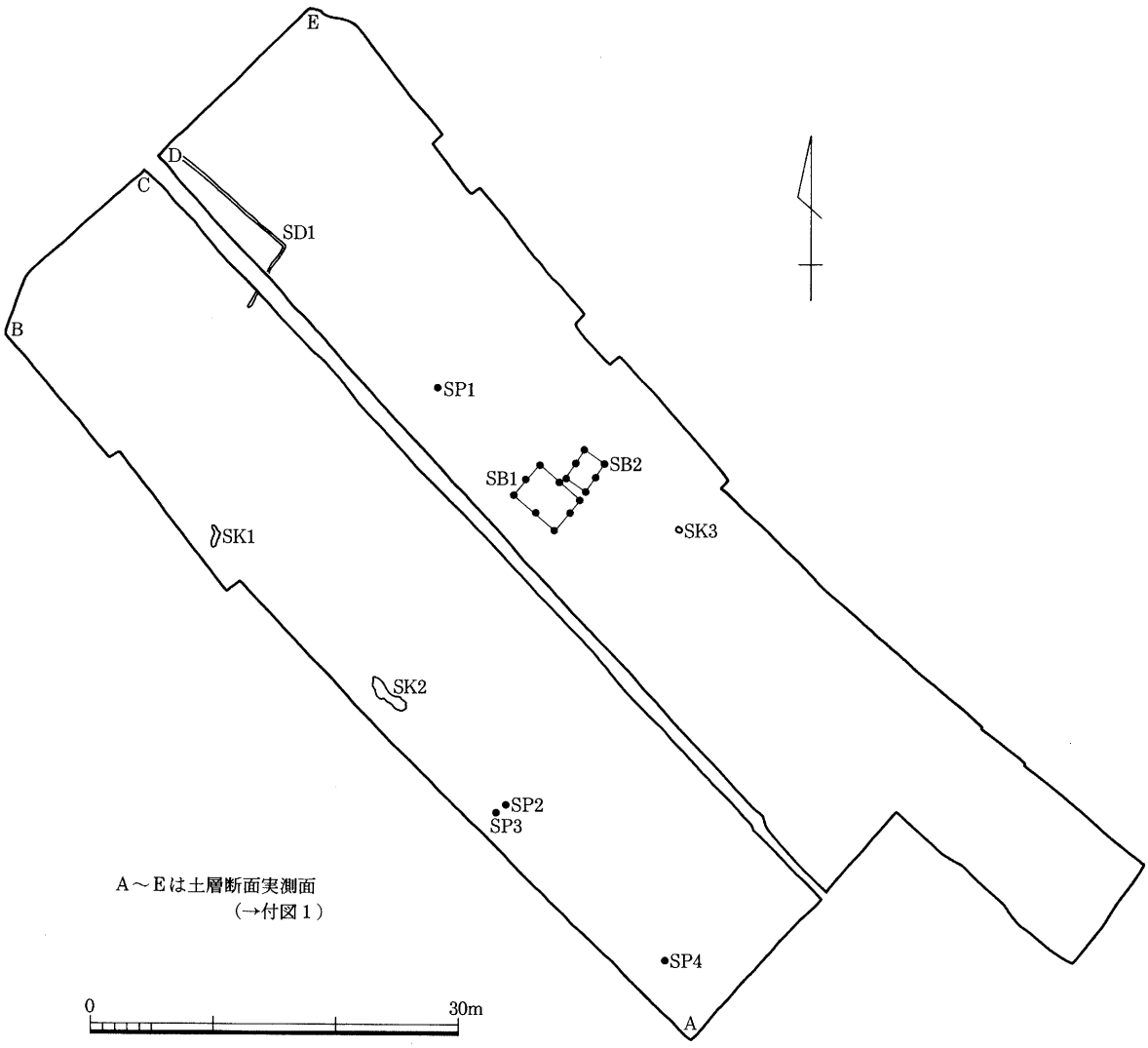
第１節　上原遺跡

１　概略

検出した遺構には掘立柱建物、溝、土坑、ピットがあった。出土遺物は縄文時代から近世までのものが見られたが、遺構から出土したものはわずかな量であった。

基本層序は、①盛土、②灰褐色細砂（旧耕土）、③が②と④のブロック土、④黄橙色礫混じり粘土（床土）、⑤にぶい黄橙色粘土、⑥にぶい黄橙色礫混じり粘土（包含層）、⑦にぶい褐色粗砂混じり粘土、⑧にぶい褐色粗砂混じり粘土、⑨黄褐色粗砂混じり粘土であった。

（第４図・付図１）



第４図　遺構配置模式図（1/600）

2　遺構と遺物

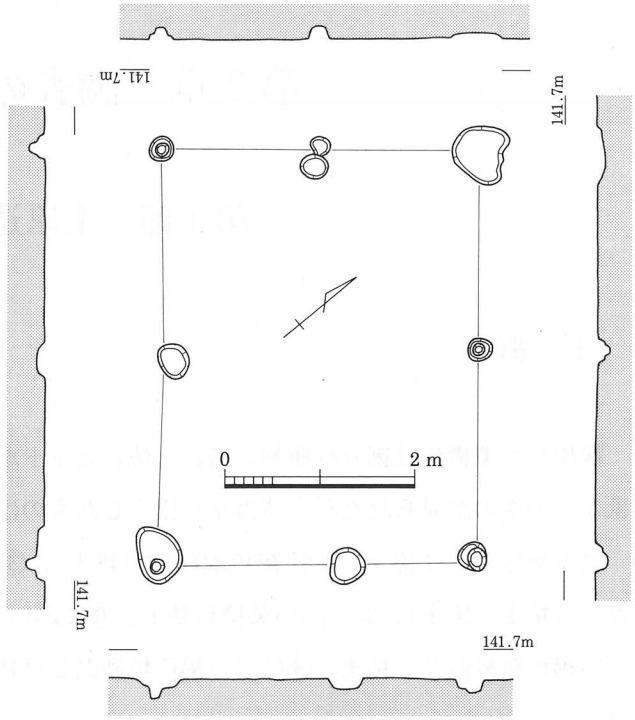
（1）掘立柱建物

調査区からは多数の柱穴が検出されたが、復元できたのは２棟だけである。

［ＳＢ１］（第５図、図版３）

ＳＢ１は調査区の中央部に位置する掘立柱建物である。復元した建物は桁行２間、梁行２間である。遺構の規模は桁行4.45ｍ、梁行3.4ｍ、柱穴の径0.16～0.24ｍ、柱穴の深さ0.08～0.22ｍを測る。主軸方向はＮ－50°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

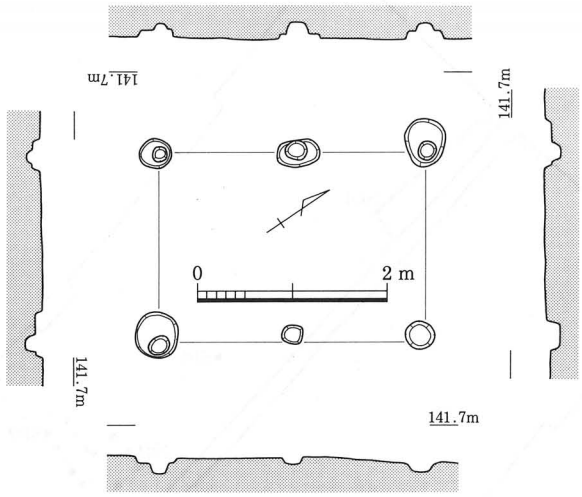


第５図　ＳＢ１遺構実測図（1/80）

［ＳＢ２］（第６図、図版３）

ＳＢ２は調査区の中央部東側に位置し、ＳＢ１の東側に近接する掘立柱建物である。復元した建物は桁行２間、梁行１間である。遺構の規模は桁行2.8ｍ、梁行2.1ｍ、柱穴の径0.16～0.28ｍ、柱穴の深さ0.16ｍを測る。主軸方向はＮ－35°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。



第６図　ＳＢ２遺構実測図（1/80）

（2）溝

［ＳＤ１］

ＳＤ１は調査区の北側に位置する。遺構の平面形は逆Ｌ字形を呈し、北西端は攪乱を受けている。遺構の規模は検出長17.08ｍ、最大幅0.25ｍ、深さ0.1ｍを測る。

出土した遺物には器種不明の須恵器があったが、細片のため図化できなかった。

（3）土坑

［ＳＫ１］

ＳＫ１は調査区の中央部西側に位置する。遺構の平面形は不定形である。遺構の規模は

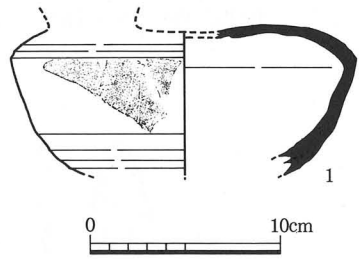
長軸1.74m、短軸0.44m、深さ0.18mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には縄文土器があったが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ２］（第７図、図版８）

ＳＫ２は調査区の中央部西側に位置する。遺構の平面形は不定形である。遺構の規模は長軸3.7m、短軸0.62m、深さ0.18mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には、須恵器の平瓶（１）があった。



第７図　ＳＫ２出土遺物実測図

［ＳＫ３］

ＳＫ３は調査区の中央部東側に位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.54m、深さ0.11mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

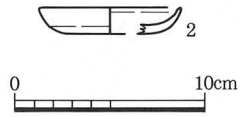
出土した遺物には瓦器の埦があったが、細片のため図化できなかった。

（４）ピット

［ＳＰ１］（第８図、図版８）

ＳＰ１は調査区の中央部に位置する。遺構の平面形は歪な楕円形である。遺構の規模は長径0.24m、短径0.14m、深さ0.07mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には土師質土器の皿（２）があった。



第８図　ＳＰ１出土遺物実測図

［ＳＰ２］

ＳＰ２は調査区の南西側に位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.44m、深さ0.2mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には鉄製の釘があったが、残存状況が不良のため図化できなかった。

［ＳＰ３］

ＳＰ３は調査区の南西側でＳＰ２の南西側に近接する。遺構の平面形は歪な楕円形である。遺構の規模は長径0.49m、短径0.37m、深さ0.15mを測る。埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には縄文土器があったが、細片のため図化できなかった。

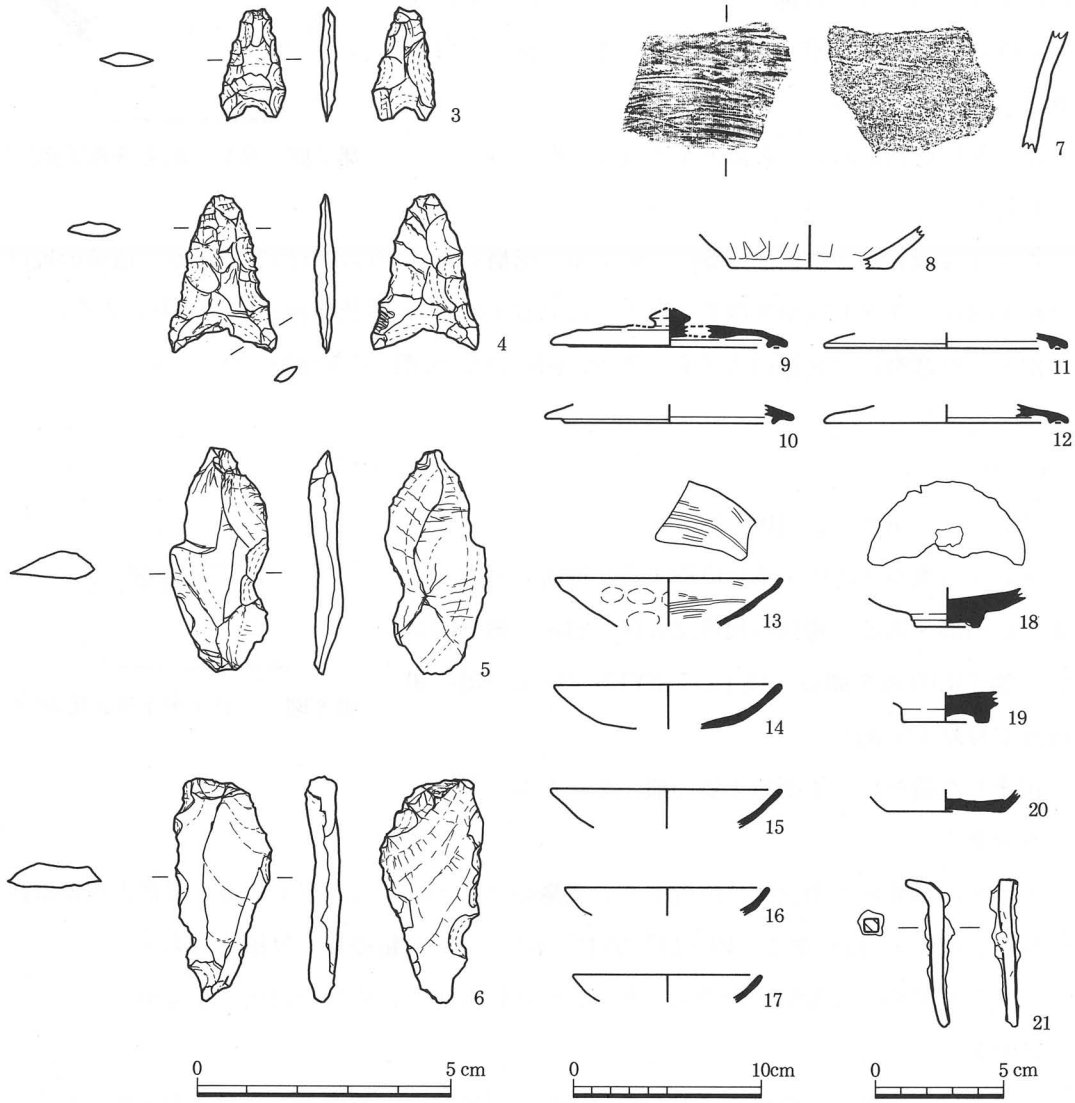
［ＳＰ４］

ＳＰ４は調査区の南部に位置する。遺構の平面形は歪な楕円形である。遺構の規模は長径0.24m、短径0.16m、深さ0.07mを測る。遺構の埋土は7.5YR5/4にぶい褐色粗砂混じり粘土である。

出土した遺物には土師質土器があったが、細片のため図化できなかった。

（5）包含層（第9図、図版8）

包含層から出土した遺物にはサヌカイト製の石鏃（3・4）・横形剝片（5・6）、縄文土器の深鉢体部片（7）、弥生土器の壺底部（8）、須恵器の蓋（9～12）、瓦器の椀（13～17）、唐津の椀（18・19）、白磁の皿（20）、鉄製の釘（21）があった。　　（鳥羽）



第9図　包含層出土遺物実測図

第2節　塚穴古墳

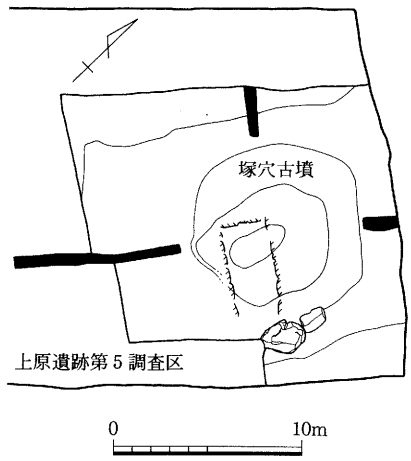
1　概略

塚穴古墳は河内長野市上原町に所在する。横穴式の石室を持つが、石室自体は昭和60年度の調査によって、近世に再構築されたものであることが確認されている。

本次調査は上原地区の区画整理事業に伴って、平成7年度に古墳墳丘及び石室内の一部と開口部付近を、平成8年度に石室内について行ったものである。

2　墳丘と石室

墳丘は南東側が削られたような格好で石室が一部露出しており、古墳時代の形状とは大きく異なっている。調査は墳丘の北東・北西・南西側に3本のトレンチを設定して行ったが、版築などの工法及び周溝・葺石などの古墳施設は確認されなかった。墳形は円形か方形かのいずれかで、規模は長径もしくは長辺が16m、短径もしくは短辺が13m、墳丘の高さ3mを測る。墳丘南西側裾部や墳頂部には石造物が集積しており、紀年銘からほとんどが近世のものである。（第10・30図、図版4）



第10図　墳丘トレンチ配置図（1/400）

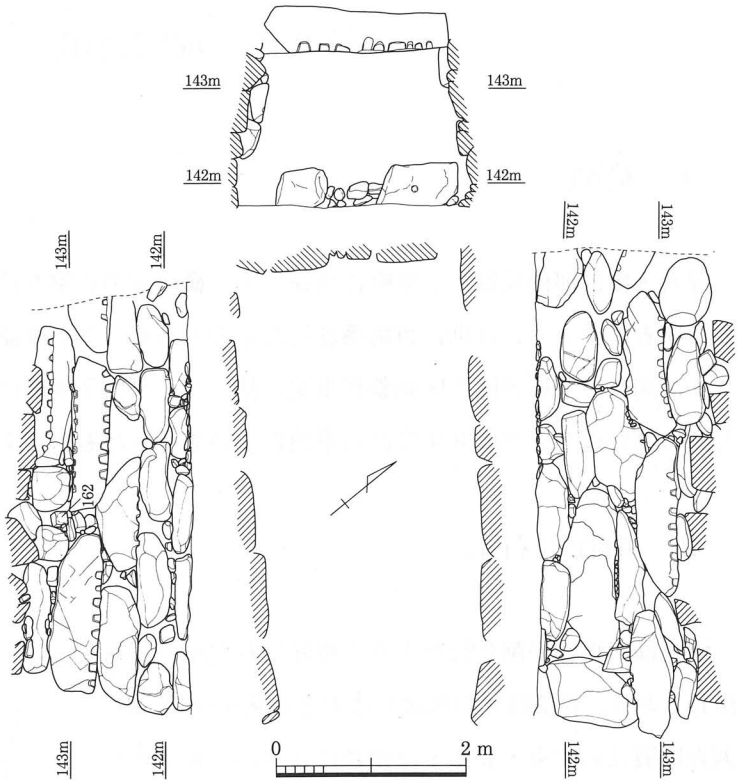
石室は横穴式で、奥部裾部に板状の石材を立て並べて設置している状況が認められるものの、奥壁は存在しない。また、羨道、玄室の区別もない。石室開口部は南東側にあり、主軸方向はN－51°－Wである。石室の全長は5.2m、幅は開口部2m・中央部2.4m・奥部2.3m、高さは開口部1.7m・中央部1.6m・奥部1.6mを測る。

石室石材は側壁の1・2段目には自然石が用いられているが、3段目以上の石材には矢穴が認められる。天井石は平石を割って柱状にしたものを用いており、それぞれに矢穴が認められる。おそらく鏨の刃先は二寸幅とみられる。(註1) この工法から判断して、側壁の3段目以上から天井までが近世に構築されたことは間違いない。側壁下部の自然石に関しても、構築方法が非常に不安定であることから積み直されたものである可能性が高い。

石室内は外部より低くなっており、入口には長さ1.94m、幅0.38mの柱状の石材を埋設している。石材の上面には5㎝程の段差があり、低い側には径6㎝の円形のほぞ穴が、高い側には4㎝×11㎝の長方形のほぞ穴が穿たれている。その形状から敷居などの石材を再利用したものと考えられる。ある程度水平に据えられているので、戸板を付けて石室を閉

ざすために利用する事もできたかもしれない。その外側には長さ110㎝、最大幅64㎝の平坦な自然石が設置されており、階段として用いられたものと考えることができる。

石室奥部では天井石が一部折れて落下しており、その割れ目から墳丘の盛土が落ち込んでいた。基本層序は盛土を除去した後、褐灰色シルト混じり礫（全面に灰が確認された＝第31図①層）、にぶい黄橙色粗砂混じり細砂＝第31図③層）、灰白色微砂（＝第31図⑨層）、黄色細礫層（地山）であった。石室内では３面の遺構面が確認され、第１遺構面は①の上面、第２遺構面は③の上面、第３遺構面は⑨の上面でそれぞれ検出された。（第11・31図、図版４）



第11図　石室実測図（1/80）

3　石室内第１遺構面

第１遺構面は、①褐灰色シルト混じり礫層の上面で検出された。礫の間には非常に細かい灰が確認された。土坑などの掘り込みは見られなかったが、石造物が据え置かれたと考えられる状況が確認された。

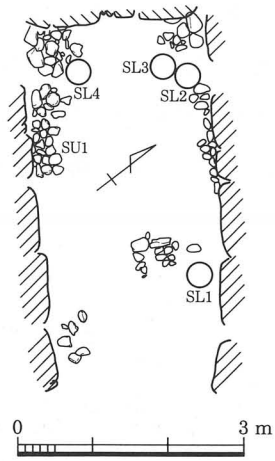
石造物は石室奥部でまとまって確認されている。しかしながら、割れた天井石がその上に落下しているため、確実に原位置を保っていると考られるものはなかった。わずかに原位置を保っている可能性のあるものは、石室奥部中央で検出された上面にほぞ穴のような穴が穿たれた平石（第31図▲印）と、右奥部で検出された上面に反花が刻まれた基壇（172）である。平石のほぞ穴と思われるものは8㎝×18㎝の長方形で石室入口方向に短辺を向けていた。石室内から出土した他の石造物には、このほぞ穴に収まるほぞを持つものはない。基壇については、30㎝程離れたところで地輪部分を欠失した一石五輪塔（154）が天井石の下敷きになっており、この五輪塔の基礎として用いられた可能性がある。

平石の奥でまとまって出土した石造物は墳丘頂部に祀られていたものが天井の崩壊により落下したものである可能性がある。（第31図、図版５）

4　石室内第２遺構面

第２遺構面は③にぶい黄橙色粗砂混じり細砂層の上面で検出された。この細砂層は石室内全面で確認された。石室再構築時に床面に敷かれたものと考えられる。

この遺構面で確認された遺構として埋甕４基、石敷がある。（第12・31図）



第12図　第２遺構面遺構配置模式図（1/100）

（１）埋甕

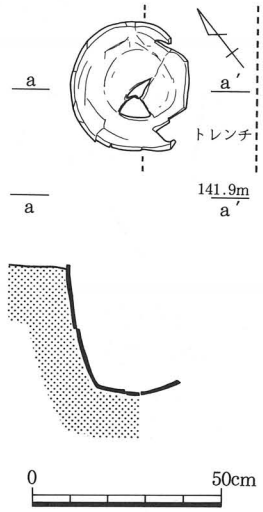
石室内で４基検出された。このうち３基の甕の内部には火葬された人骨が埋納されていた。(註2)

［ＳＬ１］（第13図、図版５）

石室入口寄りの右側壁に沿って検出された。甕は土師質で口縁部は破損しており、設置後に削平されたものと思われる。甕の掘り方は明確に確認できなかった。

甕の内部に骨片は認められなかったものの、甕内の埋土からは丁寧に埋められた様子がうかがわれる。蓋は検出しなかったが、石室内からは焙烙が多く出土しており、焙烙を転用した蓋が存在した可能性もある。

また、甕に沿った石室壁面の基部に用いられている石の上面に、蜂巣状の複数の凹みがあることが確認された。この凹みは磨いて穿ったものである。この石とＳＬ１の関連は不明である。



第13図　SL1遺構実測図（1/20）

［ＳＬ２］（第14図、図版６）

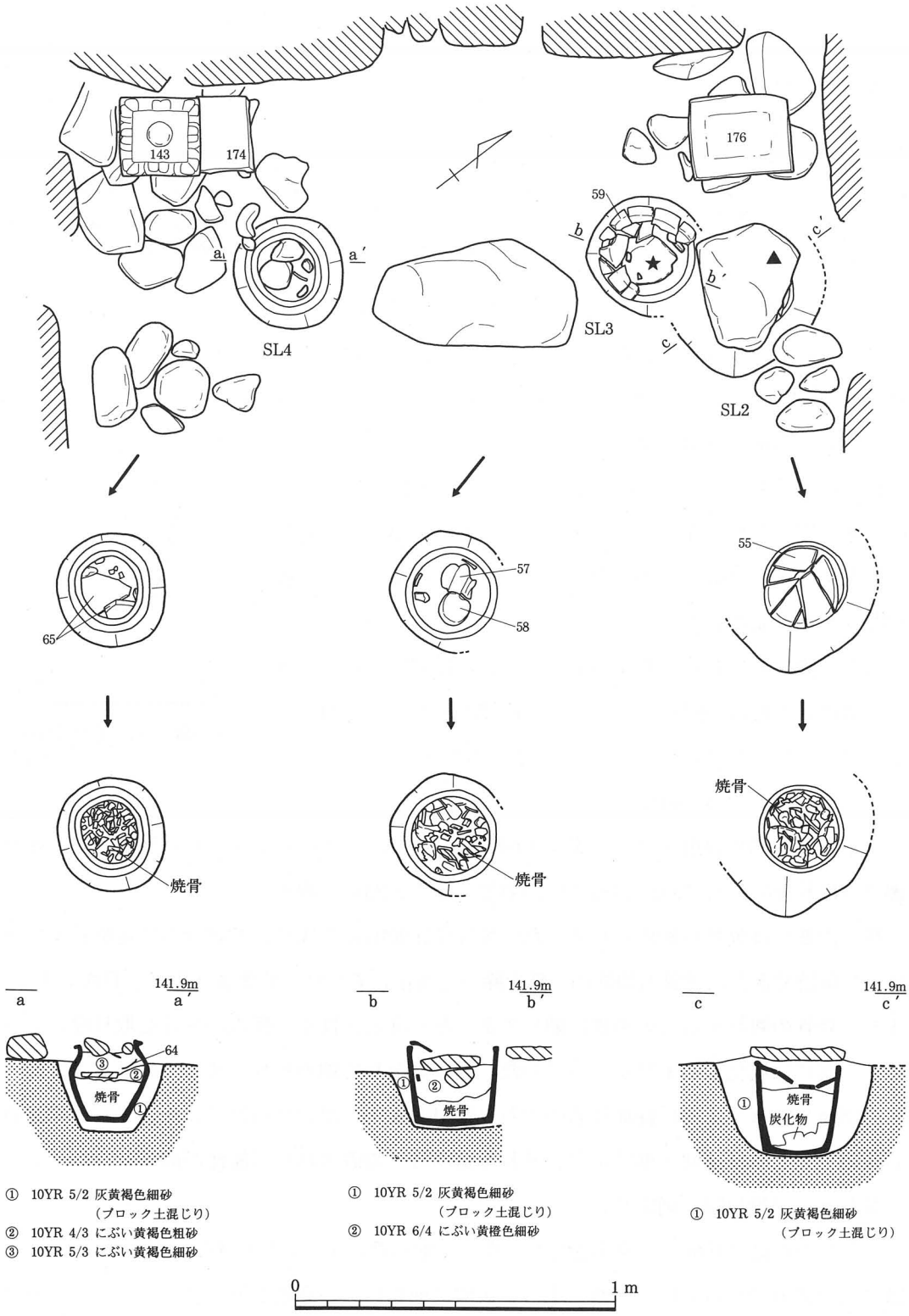
石室奥部右側で検出された。甕は土師質で、つまみの無い蓋がかぶせられていた。甕の掘り方は長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.28mを測る。

甕の内部には焼骨が納められていた。焼骨は比較的よく残り、頭蓋骨から足根骨までほぼ全て確認できた。骨盤も仙骨の一部を除いて残存しており、被葬者は男性と判断できる。また、椎骨の観察からこの男性は熟年であったと推定される。甕内の焼骨を取り除いていくと、底には炭化した木材が入っていた。甕は蓋をして納められ、その上には蓋より大きめの38㎝×32㎝×７㎝の緑泥片岩の平石（第14図▲印）がのせられていた。平石と周囲の石敷の上面とはほぼ同水準であり、それらは同時に設置された可能性が高い。

［ＳＬ３］（第14図、図版６）

ＳＬ２の左側に近接して検出された。甕は土師質で、ＳＬ２と同様に丁寧な作りである。蓋にはつまみの付いていた痕跡があり、表面に植物らしい意匠が描かれている。蓋は中央部が割れて内部に落ち込んでいた。甕の掘り方は径0.35mの円形で、深さ0.18mを測る。

甕内には平石（第14図★印）が中央に入っており、その下には一石宝篋印塔の相輪が２点入っていた。それらを除去すると焼骨が確認された。相輪や平石が意図的に入れられたものか、偶然上から落ち込んだものかは明らかでないが、蓋の中央が割れて中に落ち込んでいることから、後者の可能性の方が高い。焼骨は体幹部分以外は細片で、量も少なかった。



第14図　ＳＬ２～４遺構実測図（1/20）

ＳＬ２との切り合い関係は明確に観察できなかった。ＳＬ３の甕の口縁部の水準は石敷とほぼ同水準となり、ＳＬ２よりも高くなることから、若干ＳＬ３の方が新しいとも考えられる。また、ＳＬ２には蓋の上に平石が据えられていたが、ＳＬ３においてそのような上部構造は確認できなかった。ＳＬ２・３の奥部右側壁に沿った石敷の上には、加工された花崗岩の板石（176）が設置されていた。

［ＳＬ４］（第14図、図版６）

石室奥部左側で検出された。甕は陶器で蓋はない。甕の掘り方は径0.33mの円形で、深さ0.21mを測る。

甕の内部にはこぶし大の石が２個、平瓦の破片が１枚分落ち込んでいた。平瓦は接合すると甕の口径を上回る大きさになるため、この埋甕の蓋であった可能性もある。これらを除去すると焼骨が確認された。焼骨は体幹部分以外は細片で、量も少なかった。また、土師質の皿が１点、寛永通宝が４点、銭銘不詳の銅銭が１点入っていたが、土師質の皿は平瓦より上の水準で立った状態で出土しているため、上から混入している可能性もある。

ＳＬ４はＳＬ３と石室の中軸線を挟んで対称になるように位置している。ＳＬ３と同様に甕口縁部の水準は石敷とほぼ同水準であり、上部構造も確認されなかった。また、ＳＬ４の奥の左側壁に沿った石敷の上に、２個体の砂岩製の板石（173・174）が設置され、その上には別石宝篋印塔の基礎（143）が置かれていた。これも中軸線を挟んで（176）と対称に配置されている。これらのことからＳＬ３とＳＬ４は同時期に設置されたものと考えられる。ＳＬ３とＳＬ４の間には長辺64㎝、短辺34㎝の自然石（第31図★印）が置かれており、ＳＬ３・４を祀るために設置されたものとも考えられる。石の前面の地面が焼けており、火を用いた何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

（２）石敷

［ＳＵ１］（第31図、図版７）

こぶし大ほどの平石を細砂層上面に敷いたもので、石室奥部の左右側壁沿い及び、石室中央部付近で検出された。石敷が確認されていない床面に関しては、最初から施されていなかったものか、除去された後のものなのかは不明である。上層の礫層に入っていた礫も石敷に用いられているような平石は少ない。

５　石室内第３遺構面

第３遺構面は⑨灰白色微砂層の上面から検出された。この微砂層は遺物を含んでいない。この層の直下が地山となっていた。

この遺構面で確認された遺構としてピットが１基、溝状の落ち込みが１カ所ある。しかし、双方とも遺物は出土しなかった。（第31図）

6　遺物

（1）墳丘周辺採集石造物

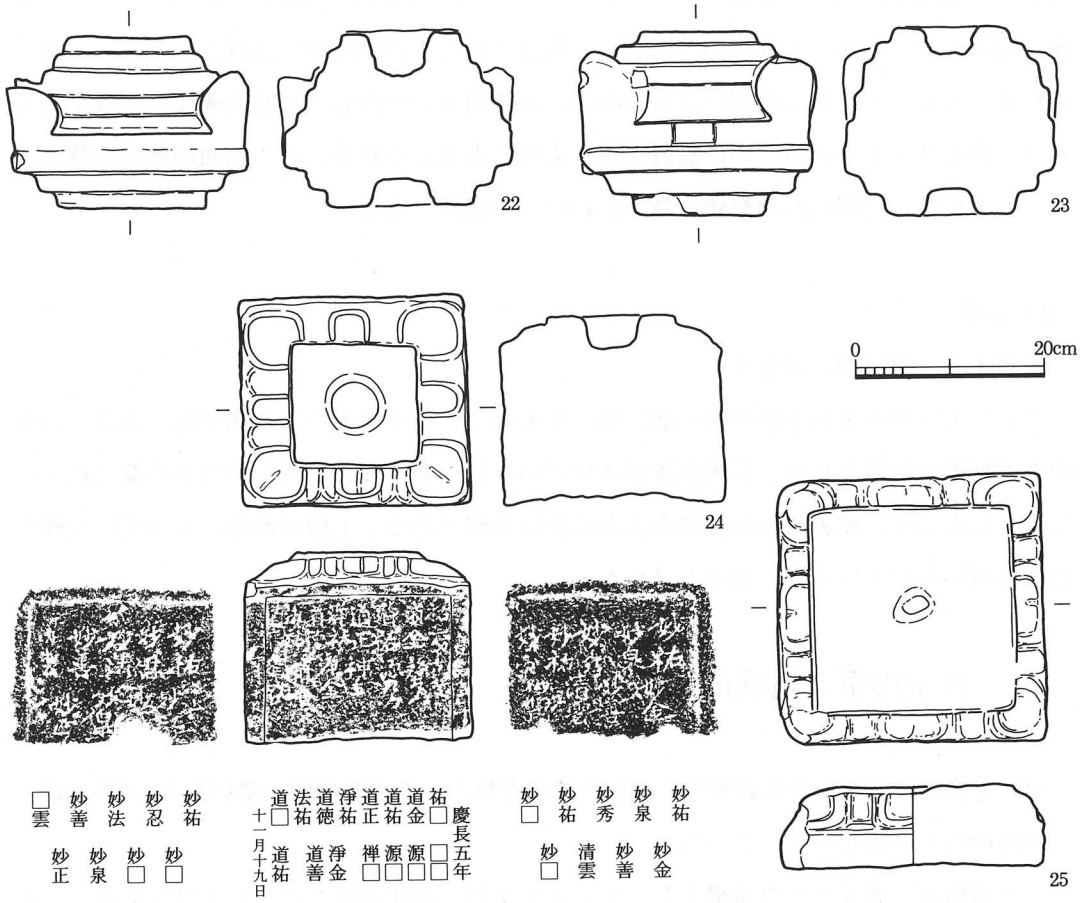
墳丘裾部及び墳頂部における調査の際に32点の石造物資料が得ることができた。その内訳は別石宝篋印塔３点、一石宝篋印塔10点、一石五輪塔４点、基壇１点、層塔14点である。

別石宝篋印塔（第15図、図版８・９）

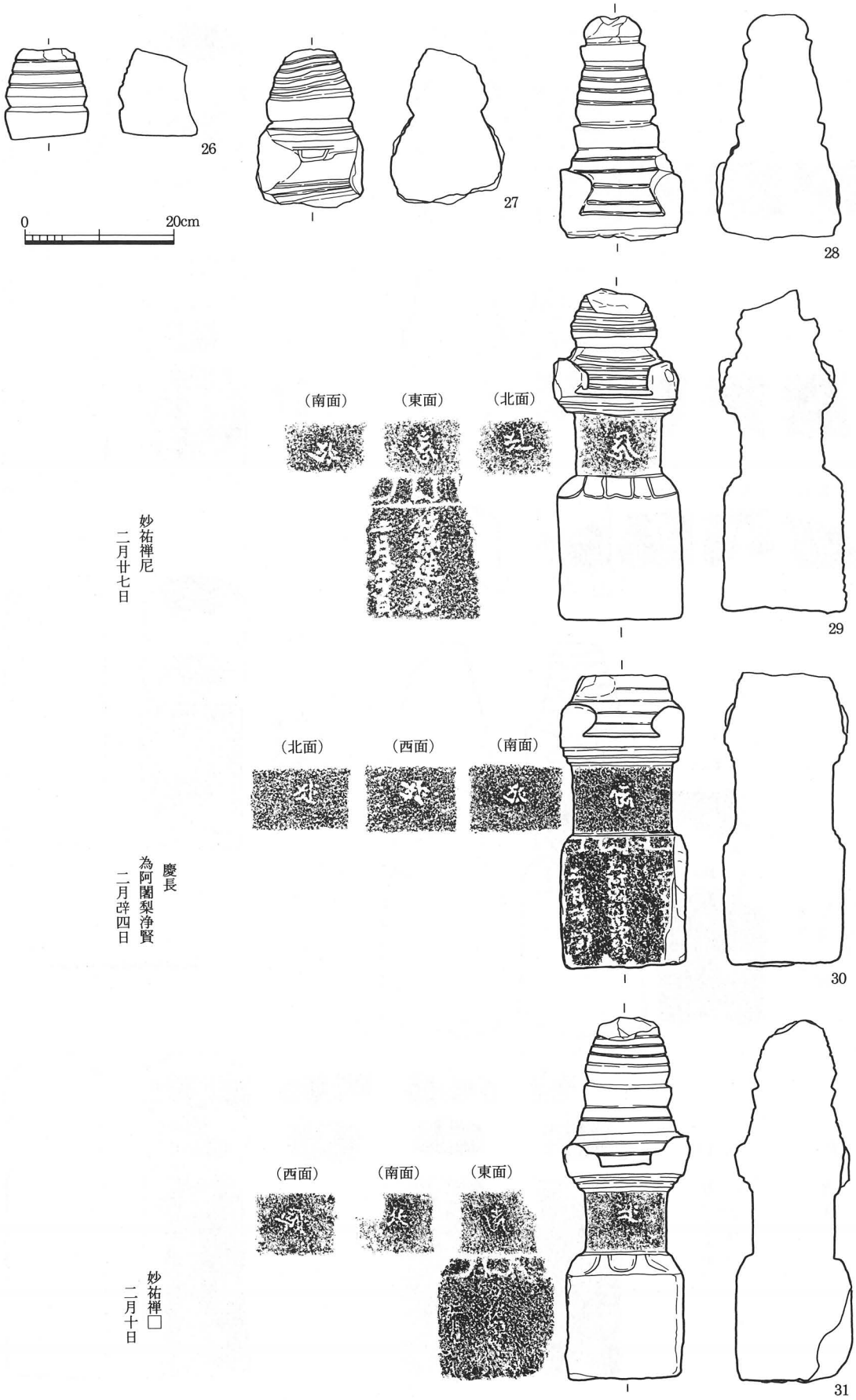
すべて砂岩製で３点（22～24）ある。そのうち屋蓋が２点、基礎が１点ある。（22）は上面にほぞ穴部分にまでつながる溝を穿っており、舎利埋納に習って骨片などを納めるためのものとも考えられる。（24）は３面に33名以上の法名が刻まれている。前面と思われる面には慶長５年（1600）の紀年銘と、男性のものと考えられる法名が刻まれており、その両隣の面には女性のものと考えられる法名が刻まれている。

一石宝篋印塔（第16・17図、図版９・10）

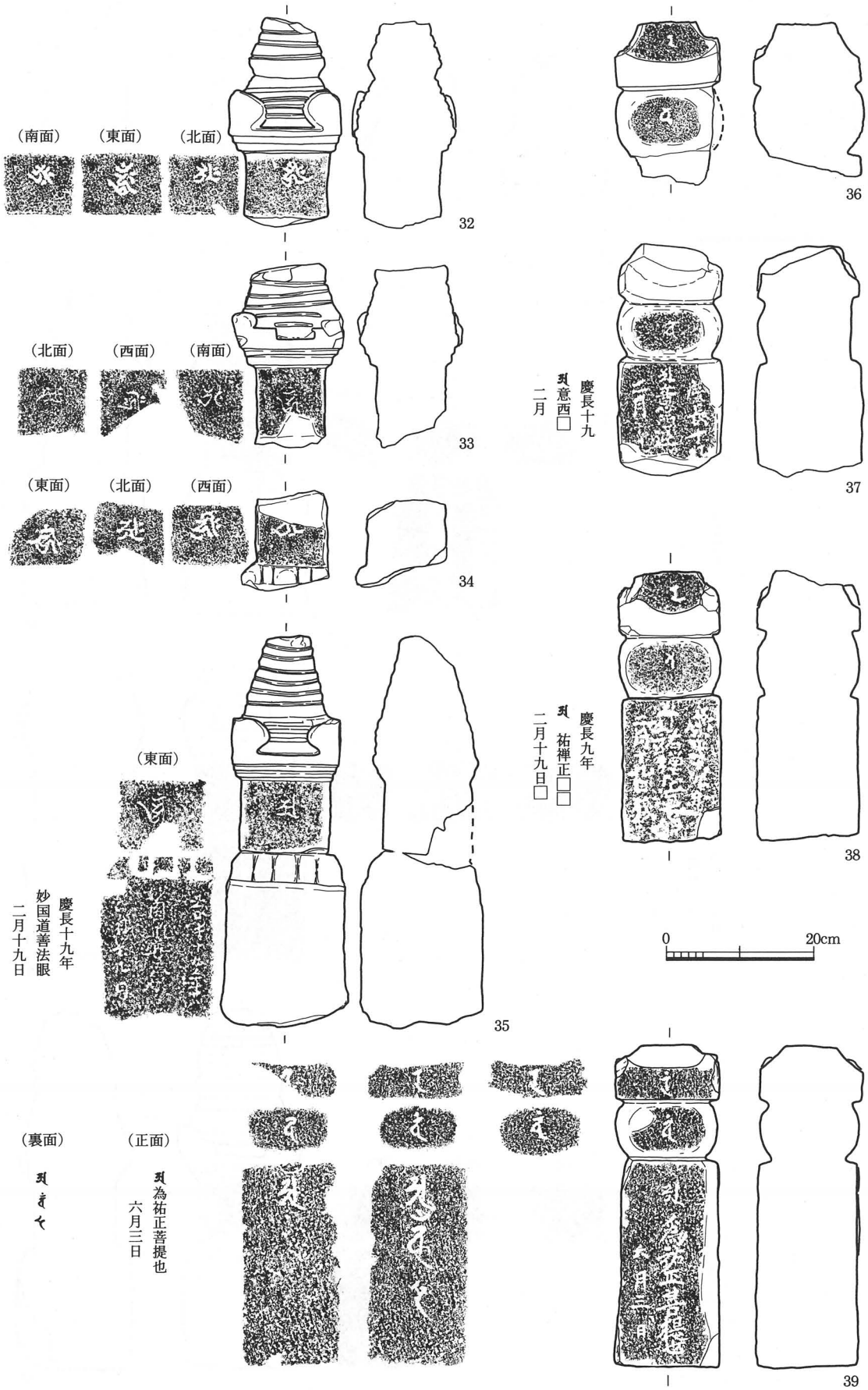
すべて砂岩製で10点（26～35）ある。造りは粗い。（30）と（35）には慶長の年号が刻まれている。



第15図　墳丘周辺採集石造物実測図（１）



第16図　墳丘周辺採集石造物実測図（２）



第17図　墳丘周辺採集石造物実測図（３）

一石五輪塔（第17図、図版10・11）

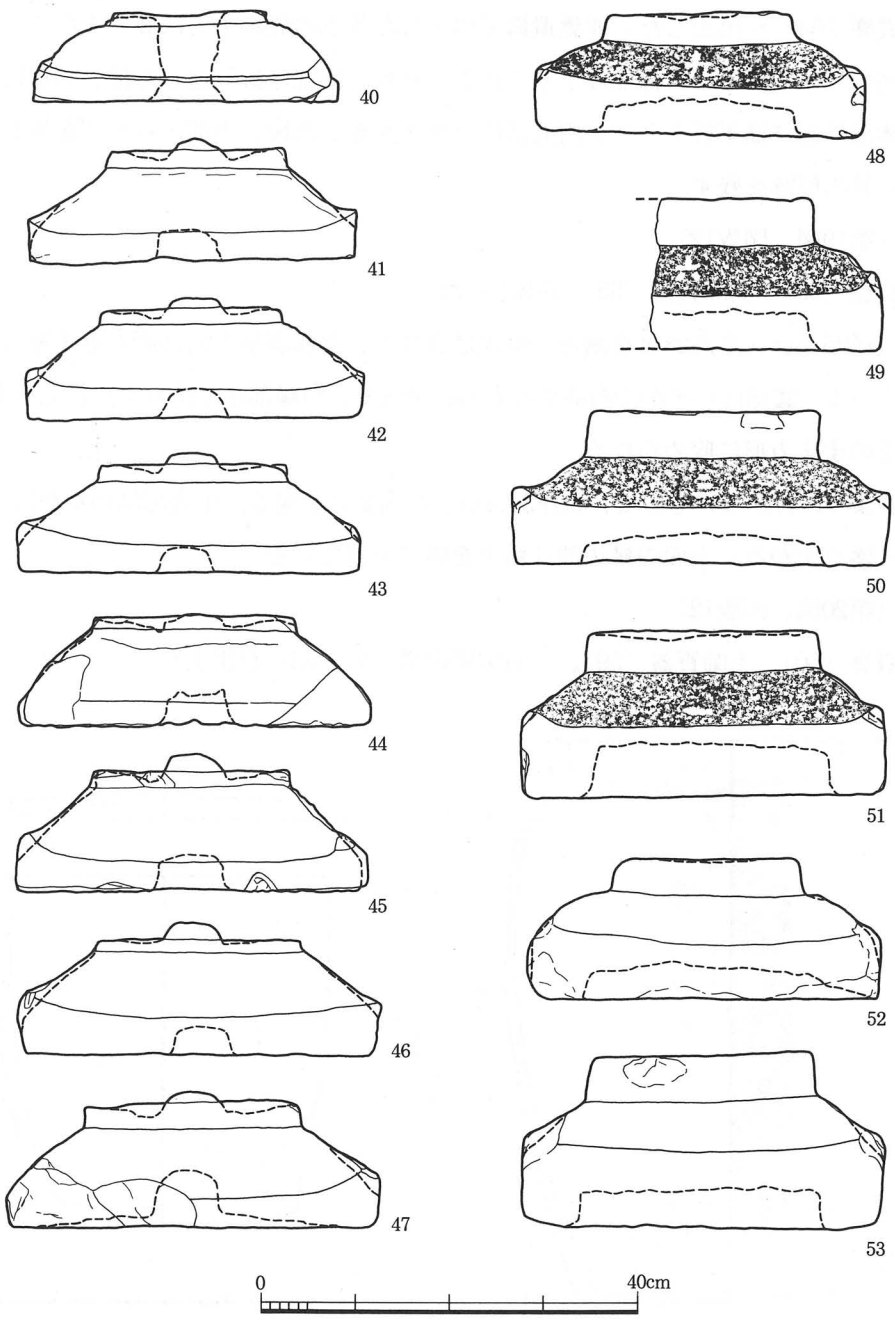
すべて砂岩製で４点（36～39）ある。それぞれ法量もよく似ており、同一時期の製作と考えられる。慶長９年（1604）、慶長19年（1614）の紀年銘が見える。

基壇（第15図、図版８）

砂岩製で１点（25）ある。上面には反花が刻まれ、中央部にほぞ穴が穿たれている。

層塔（第18図、図版11）

すべて砂岩製の屋蓋で、14点（40～53）ある。そのうち４点（48～51）には「一」、「三」、「六」、「九」の数字が刻まれている。（40）、（41～47）、（48～53）の３個体に分けられる。



第18図　墳丘周辺採集石造物実測図（４）

（２）石室内出土遺物（土器類）

石室内では近世のものと思われる資料が多く得られたが、第２遺構面の埋甕遺構の他には確実に遺構に伴うものはない。ＳＬ１～４までの埋甕遺構から出土した遺物には、土師質甕が３点、土師質蓋が２点、土師質皿が１点、陶器甕が１点、平瓦が１点、銅銭が５点、一石宝篋印塔の相輪が２点である。

それ以外のものは上層・下層の２つの包含層に分けて取り上げた。上層包含層は前述の①褐灰色シルト混じり礫層、下層包含層は③にぶい黄橙色粗砂混じり細砂層および石敷の間、もしくは直上である。遺構に伴わない石造物については後に一括して述べる。

ＳＬ１（第19図、図版12）

土師質甕（54）が出土した。埋甕遺構で出土した４点の甕の中では最も大きく、口径27㎝、器高44.5㎝を測る。口縁部は丁寧に仕上げられ、端部は折り返した後、方形に収められる。体部外面には平行タタキ、内面にはハケメを施した後、下部のみナデを施し、上部には当て具の痕跡を残す。

ＳＬ２（第19図、図版12）

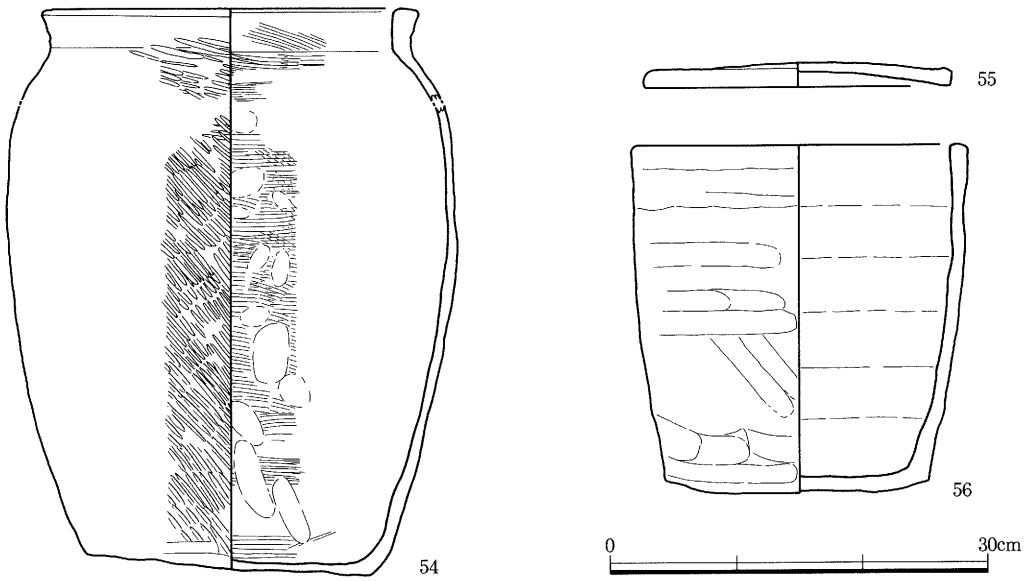
土師質甕（56）、土師質蓋（55）が出土した。

甕は口径25.5㎝、器高28㎝を測る。焼成は良好で、器面調整も内外面とも丁寧にナデが施されている。底部はわずかに弯曲するものの平底で、口縁部までまっすぐに立ち上がり、端部はそのまま方形に収められる。

蓋はつまみの付かないもので、口径24.2㎝、器高２㎝を測る。中央部はわずかに弯曲し、緩やかに盛り上がる。上面の縁辺部は粘土を盛り上げている。

ＳＬ３（第20図、図版12）

土師質甕（60）、土師質蓋（59）、一石宝篋印塔（57・58）が出土した。



第19図　ＳＬ１・２出土遺物実測図

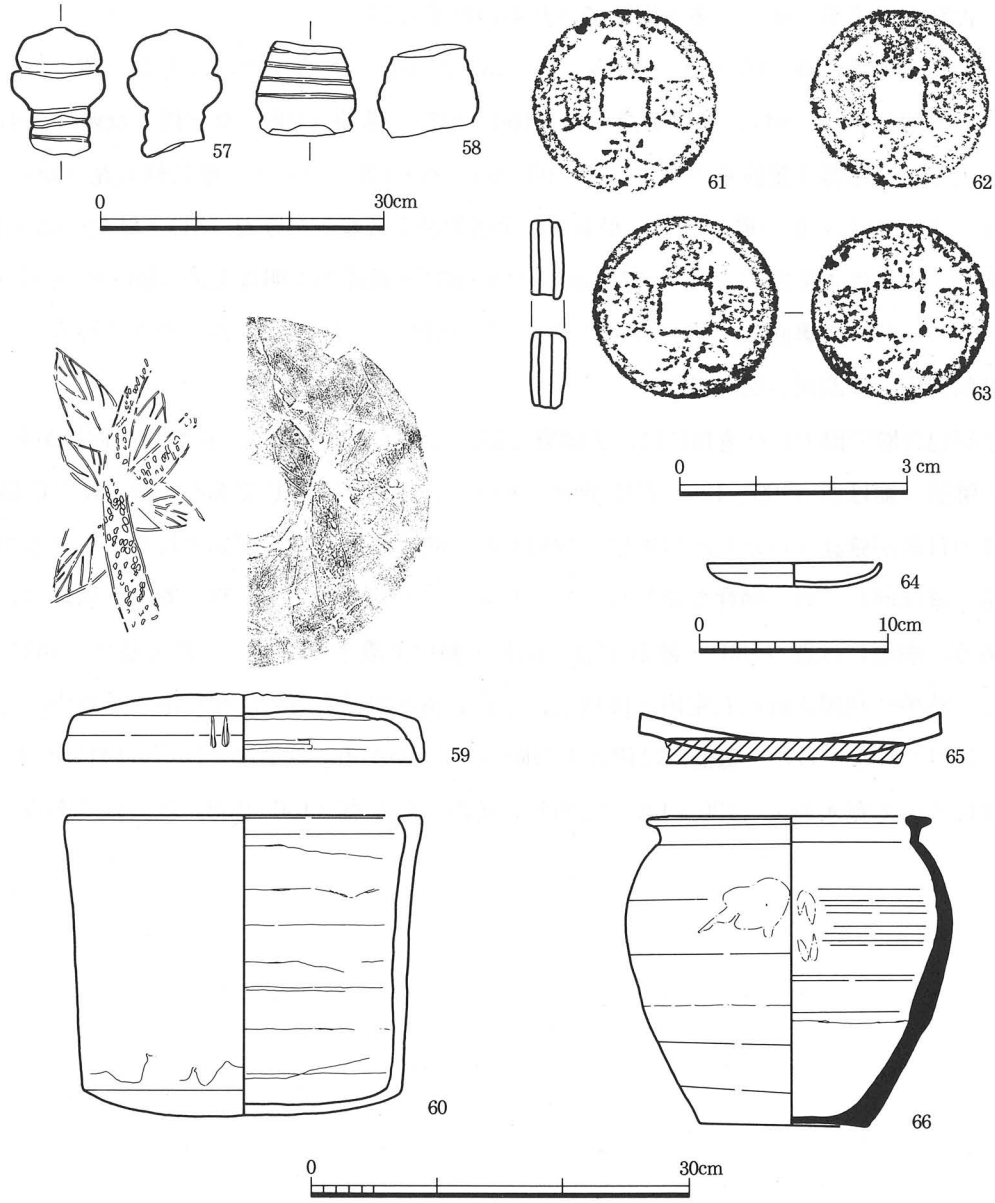
甕はＳＬ２の（56）と同じく焼成は良好、丁寧な作りである。口径28.2㎝、器高24.1㎝を測り、口径が器高を上回る。平底の底部から口縁部までまっすぐに立ち上がり、端部は外面はそのまま方形に収められるが、内面は内弯する。

蓋はつまみの付くものと思われるが、つまみは失われている。口径28.3㎝、残存高5.5㎝を測る。焙烙を逆さにしたような形で、緩やかに弯曲した中央部から端部は外下方に伸びる。内部には型作りの粘土のはみ出しと離れ砂が残る。表面には植物らしい意匠が線刻されている。

一石宝篋印塔は相輪が２点出土した。この２点は九輪の中央を欠失しているものの同一個体である可能性が高い。

ＳＬ４（第20図、図版13）

陶器甕（66）、土師質皿（64）、平瓦（65）、銅銭（61～63）が出土した。



第20図　ＳＬ３・４出土遺物実測図

甕は丹波焼と思われる。口縁部は歪んでおり口径17.5～19.4㎝、器高24.9㎝を測る。体部は平底の底部から外上方に伸び、体部上半部で内上方に伸びて肩部をつくる。頸部からは上方に伸び、端部は内方および外方に出て、平坦面をつくる。器面は赤褐色を呈する。肩部から黒釉が部分的に流し掛けされている。

土師質皿は口径9.3㎝、器高1.35㎝を測り、包含層から出土しているものと大差ない。口縁部に煤が付着しており灯明皿と考えられる。

平瓦は残存長19.1㎝、幅24.2㎝を測る。甕の蓋として利用した可能性がある。

銅銭は5点出土した。そのうち4点は寛永通宝である。残りの1点は寛永通宝に挟まれて錆化しているため確認できない。緡銭のような形で納められていたものと考えられる。

上層包含層（第21・22図、図版14）

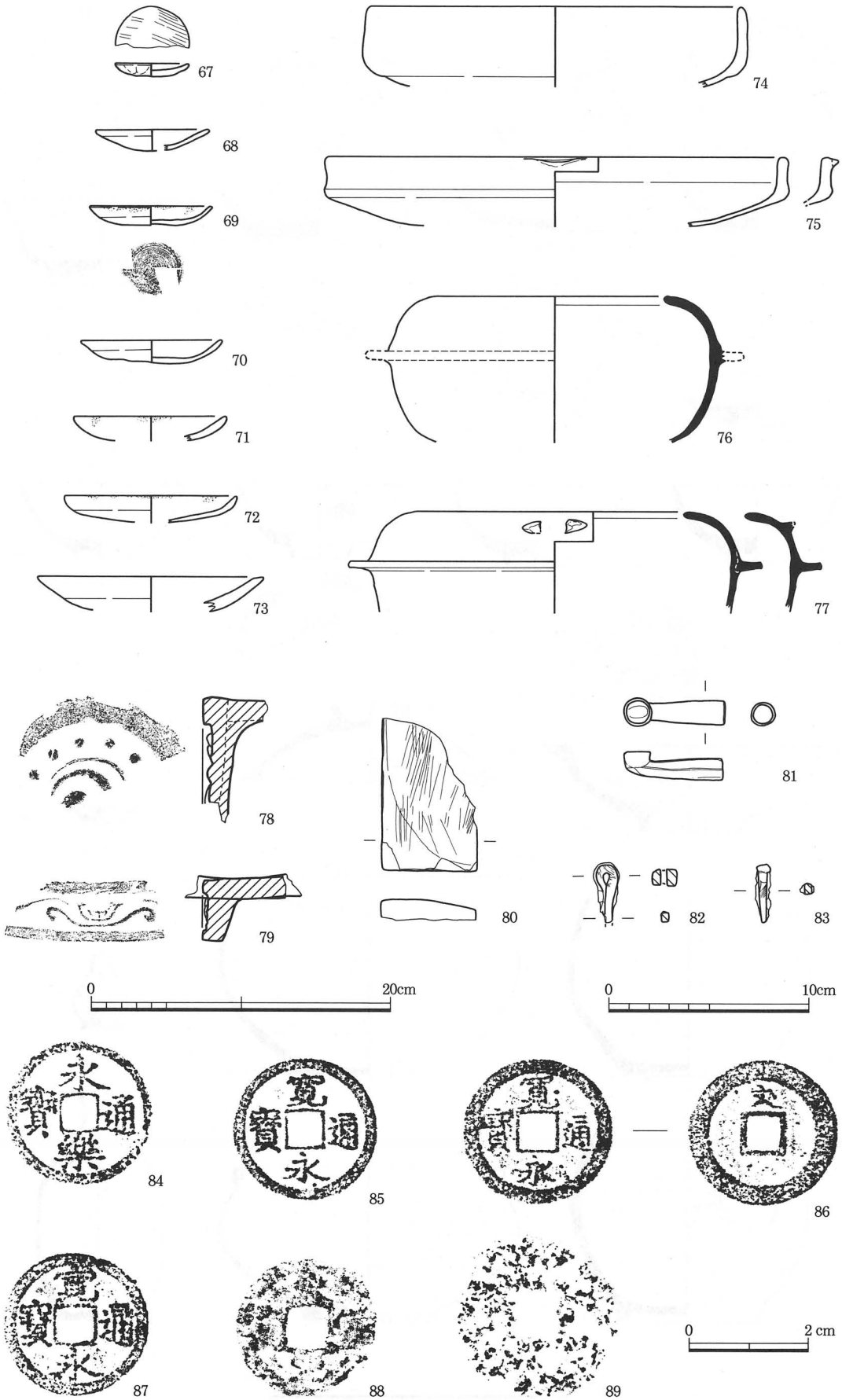
上層包含層で出土した遺物には、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石製品、金属製品、古銭があるが、細片が多く図化できたものは少ない。

土師質土器では皿（67～73）・焙烙（74・75）が多い。瓦質土器には土釜（76・77）がある。陶器は唐津（94）、瀬戸美濃（99・106・107）、備前（108）など様々な産地のものが出土した。磁器は肥前系の染付（90～93・95～98・101）がある。他に軒丸瓦（78）、軒平瓦（79）、粘板岩製の砥石（80）がある。金属製品では煙管の雁首（81）・鉄釘（82・83）がある。古銭は永楽通宝（84）・寛永通宝（85～87）・銭銘の不明なもの（88・89）がある。そのうち（86）は裏面に「文」の文字が入った文銭で、（89）は鉄銭と考えられる。

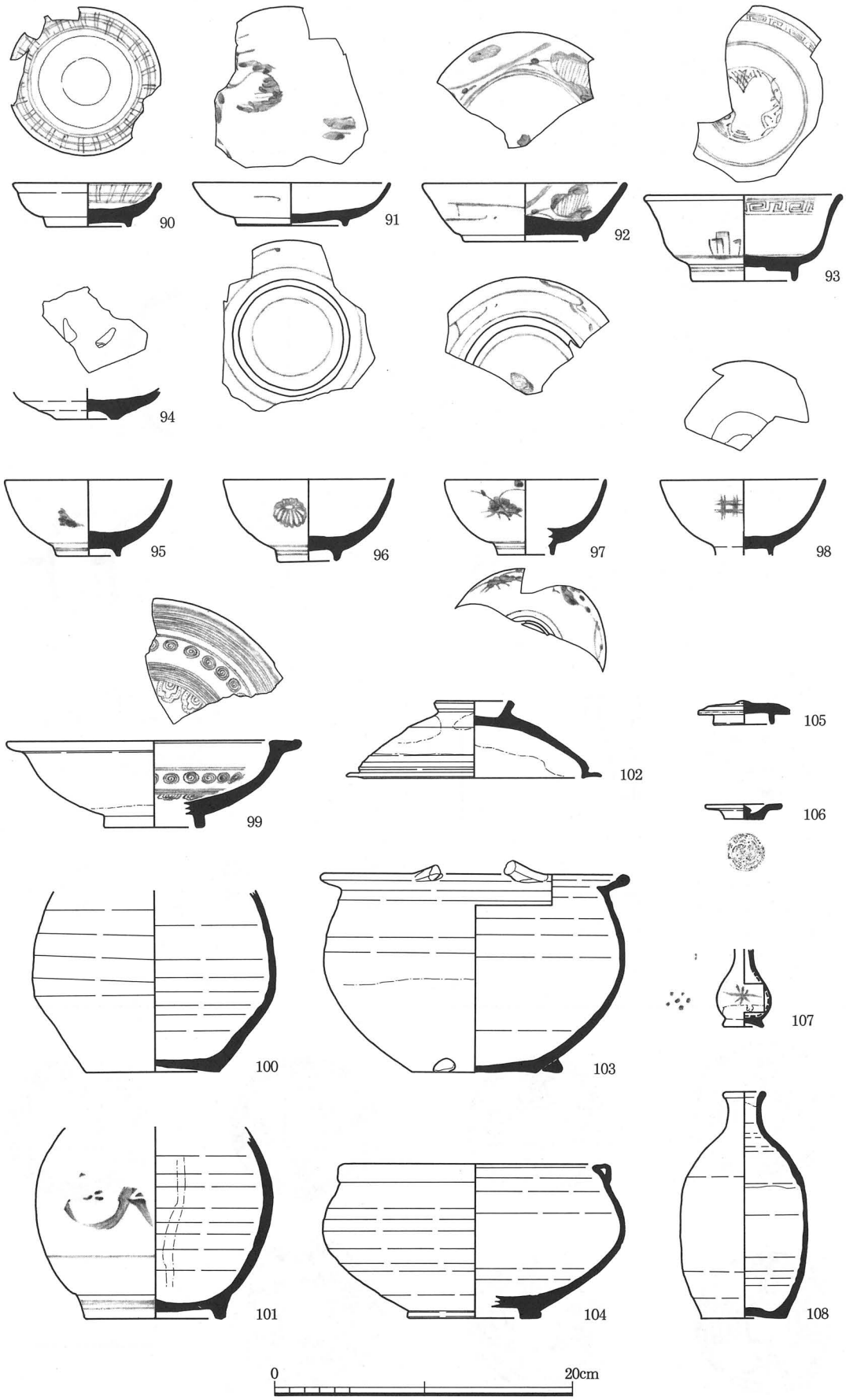
下層包含層（第23図、図版15）

下層包含層で出土した遺物には、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、鉄製品、銅銭がある。

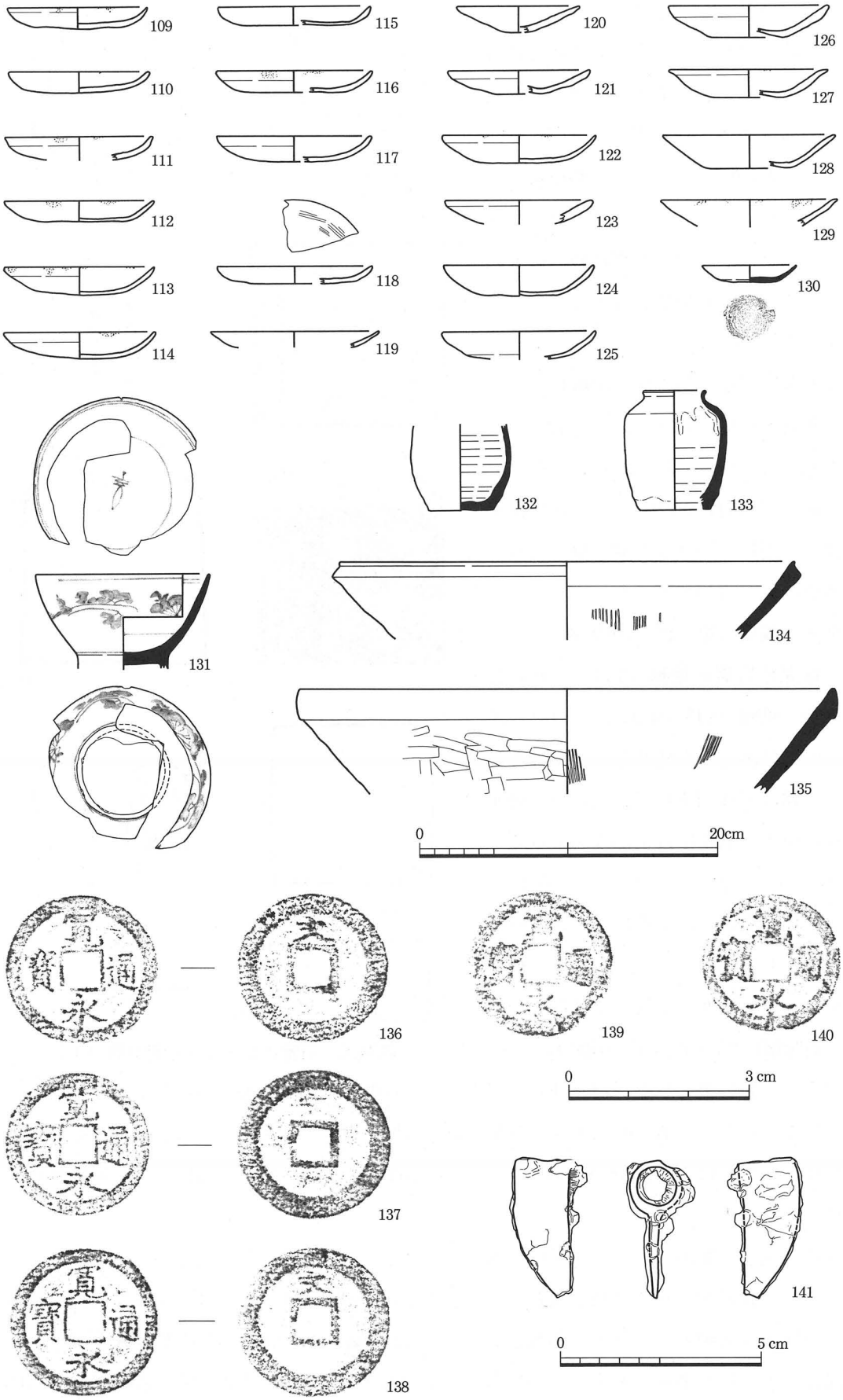
土師質土器は皿（109～129）が圧倒的に多い。法量もほぼ同じである。ほとんどの皿には煤の付着が確認されたため灯明皿と判明した。破片のため煤が確認されなかったものも法量がほぼ同じため、同様な使われ方をしたものと考えられる。瓦質土器には擂鉢（135）がある。陶器には皿（130）・備前小壺（132）・瀬戸美濃小壺（133）・丹波擂鉢（134）がある。墓地に利用された石室内の性格上、小壺も蔵骨器である可能性があるが壺内に骨片などは見られなかった。磁器には伊万里の碗（131）がある。鉄製品には鉤（141）がある。銅銭はすべて寛永通宝（136～140）であり、そのうち3点（136～138）は文銭である。



第21図　上層包含層出土遺物実測図（１）



第22図　上層包含層出土遺物実測図（２）



第23図　下層包含層出土遺物実測図

（3）石室内出土石造物

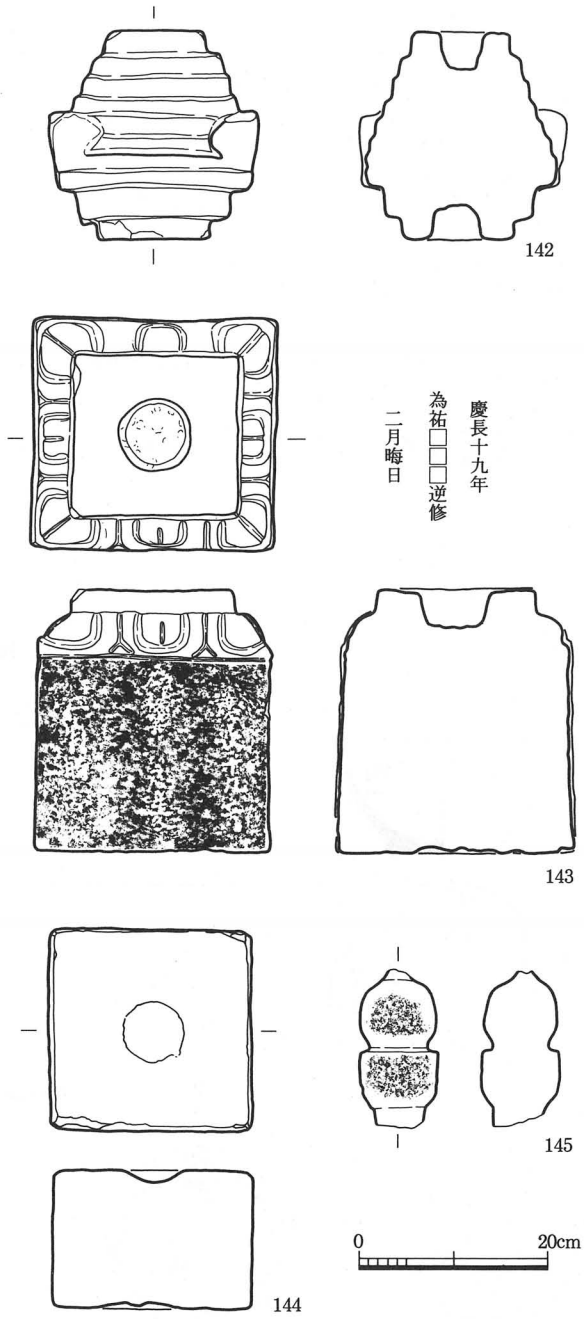
石室内において35点の石造物を資料として得ることができた。その内訳は別石宝篋印塔２点、別石五輪塔２点、一石宝篋印塔８点、一石五輪塔18点、基壇２点、板石３点である。完形品はほとんどなかった。材質は砂岩のものが大半だが、花崗岩、緑泥片岩のものもある。

別石宝篋印塔（第24図、図版18）

和泉砂岩製のものが２点（142・143）ある。屋蓋と基礎の各１点である。（143）には慶長19年（1614）の紀年銘と「逆修」の文字が刻まれており、逆修供養が行われている。

別石五輪塔（第24図、図版18）

緑泥片岩製の地輪（144）と砂岩製の空・風輪（145）がある。（144）の上面にはほぞ穴が研磨して穿たれている。銘などは刻まれていないが、緑泥片岩製の五輪塔は近世にはあまり造られず、高さ14.7㎝、幅21.4㎝の幅広で扁平な形態から、中世にまで遡る資料と考えられる。（145）は空輪と風輪を一石で造る型式のものである。



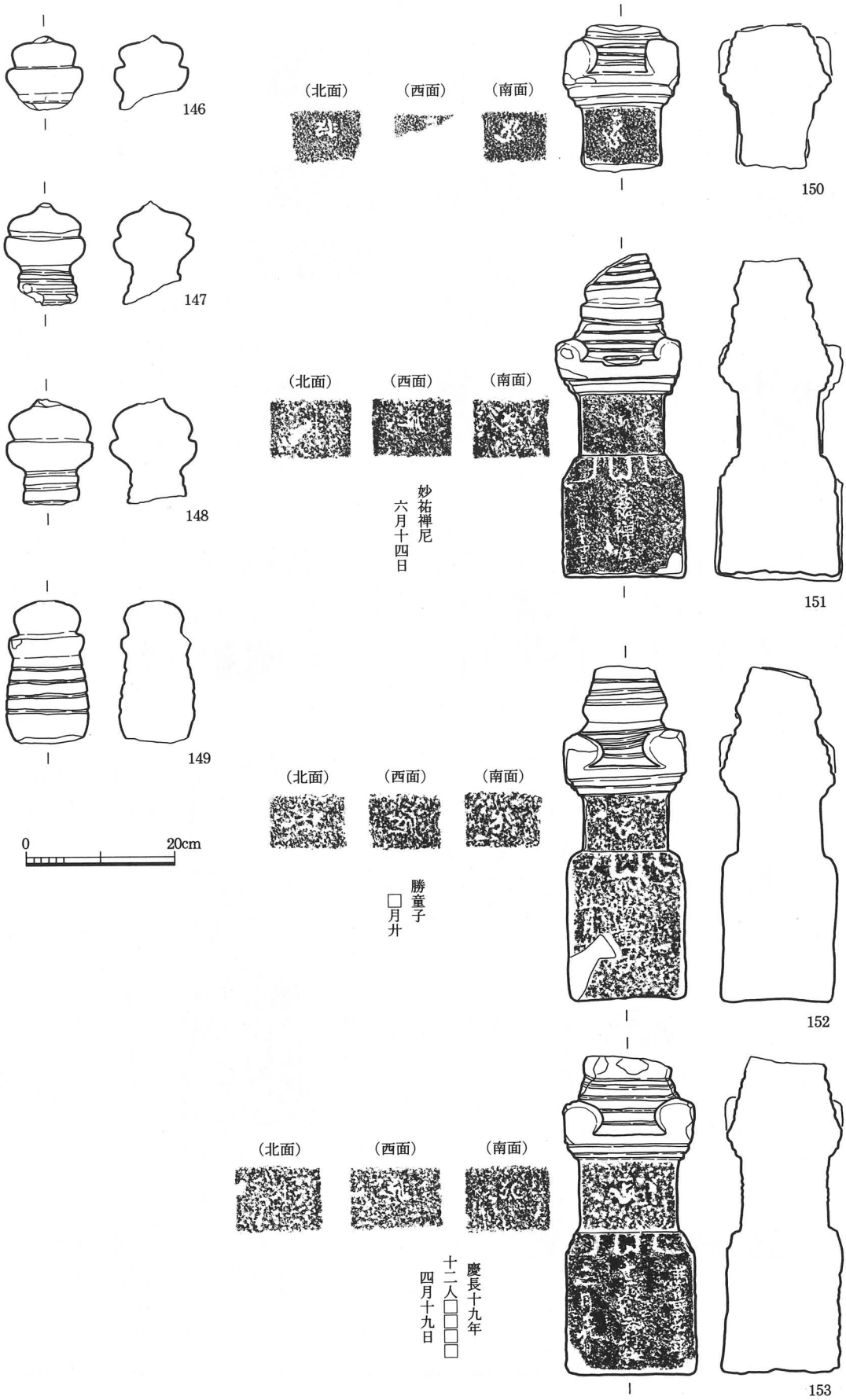
第24図　石室内出土石造物実測図（１）

一石宝篋印塔（第25図、図版16）

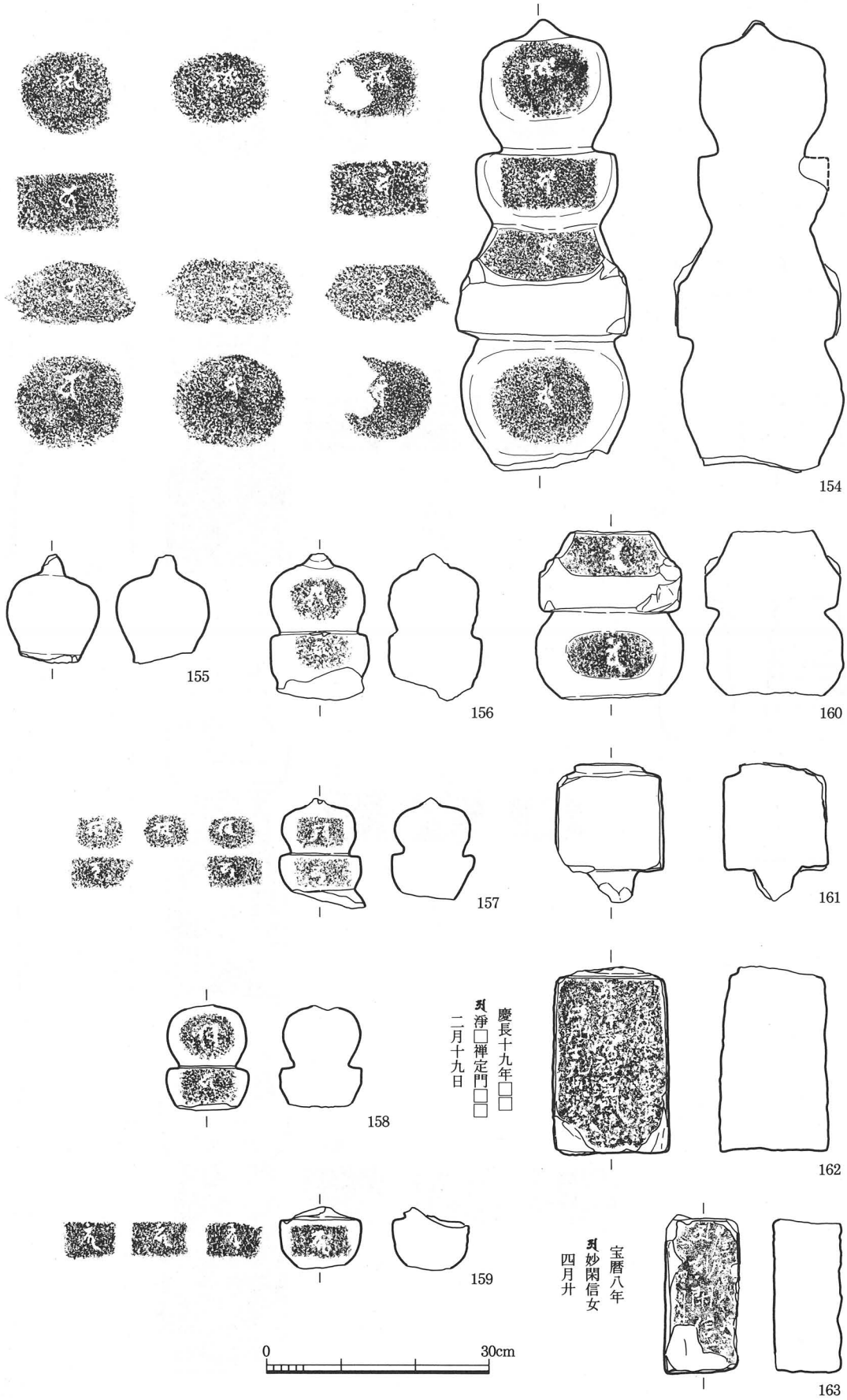
すべて砂岩製で８点（146～153）ある。これらの宝篋印塔は型式や法量などの規格に大差はないものの、造形的に多少の差異が認められ、複数の工人によって造られたものと思われる。多くは九輪部分が欠損していた。（153）には慶長19年（1614）の紀年銘が刻まれている。

一石五輪塔（第26・27図、図版17・18）

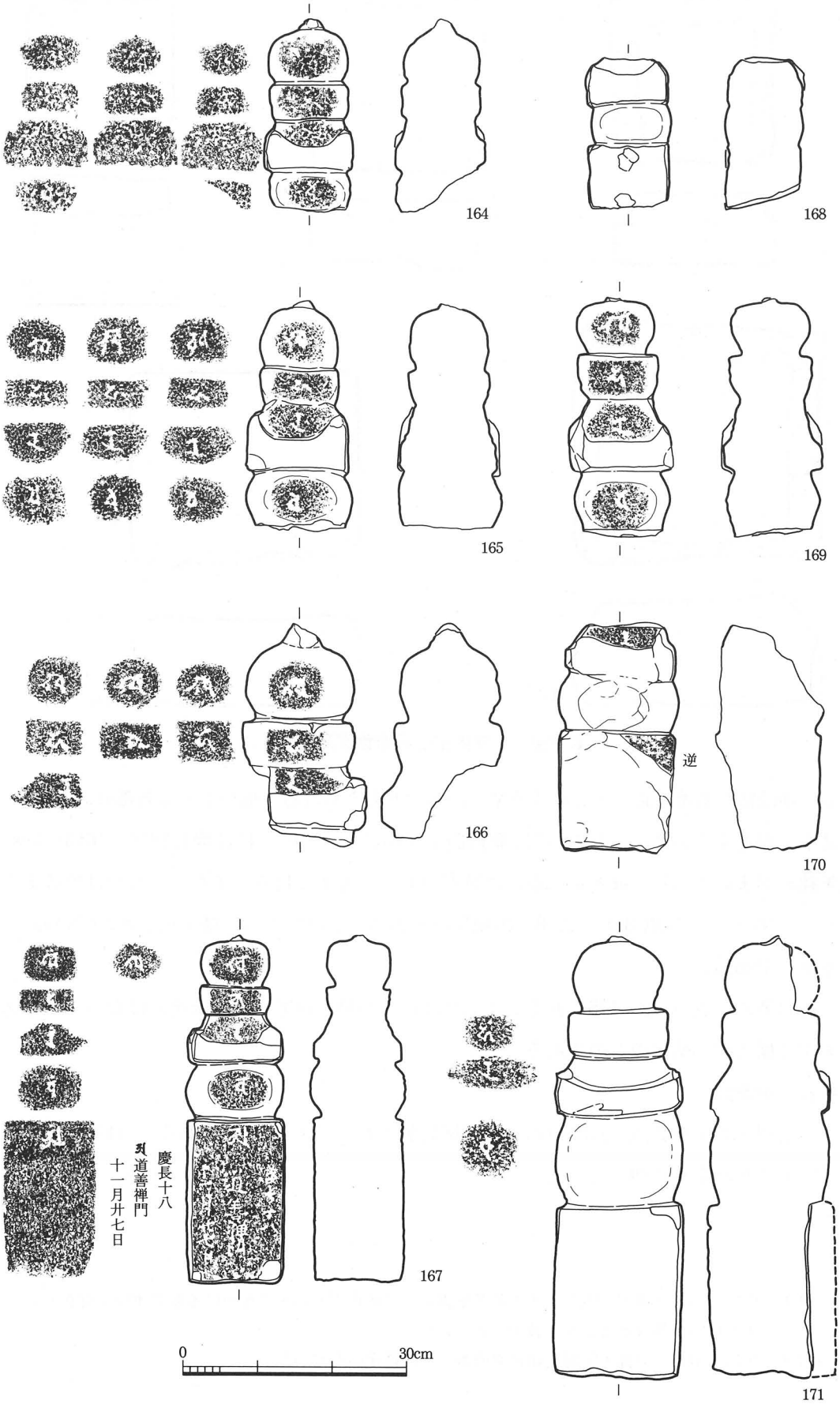
すべて砂岩製で18点（154～171）ある。型式差が認められ、（154）は総高・火輪が高く中世末まで遡るものと考えられる。（155）は空輪のみの残存であるが、最大径を中央部より上に持つ型式からやや古いものと考えられる。（161）は砂岩製の地輪部と思われるものである。下面にほぞが削り出され、上面には一体であった水輪が欠損した痕跡があ



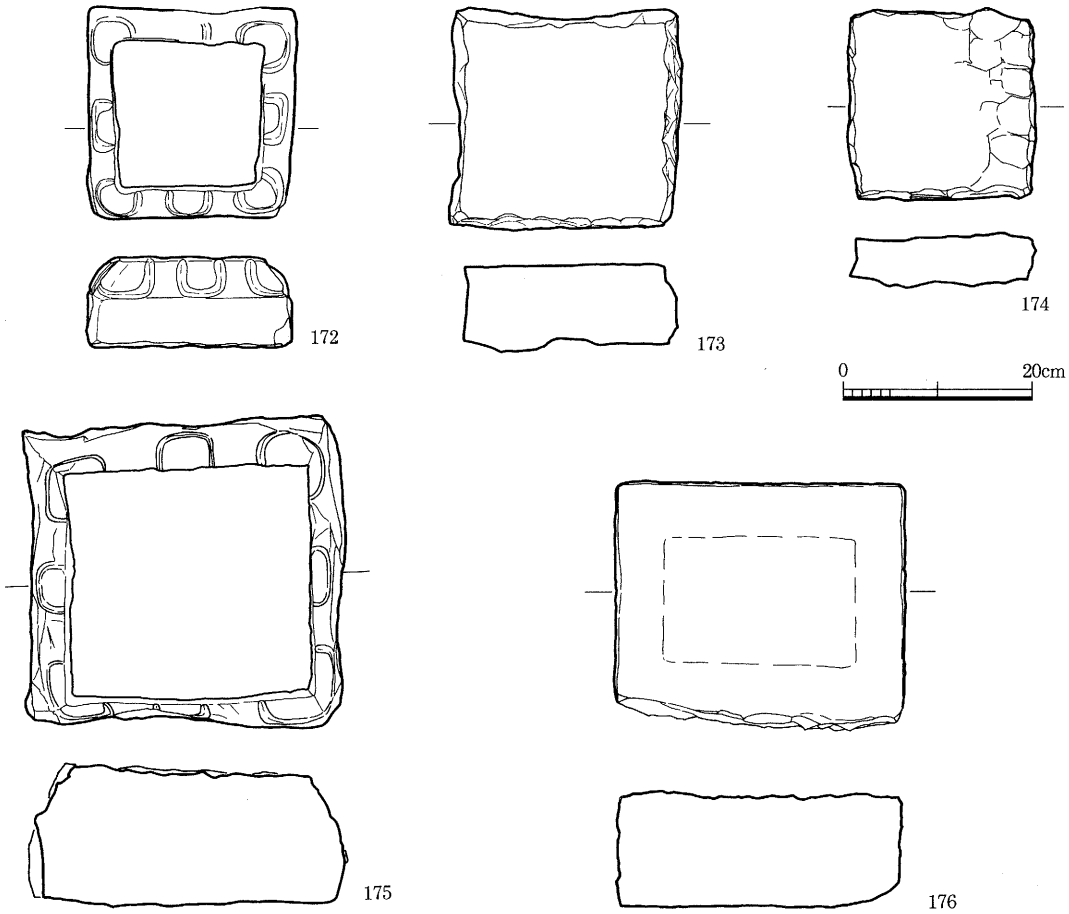
第25図　石室内出土石造物実測図（２）



第26図　石室内出土石造物実測図（３）



第27図　石室内出土石造物実測図（4）



第28図　石室内出土石造物実測図（５）

る。地輪部を基壇に乗せて設置する型式のものと考えられる。他のものは各部分の省略化、矮小化が進んでいる。（162）には慶長19年（1614）、（167）には慶長18年（1613）の紀年銘が刻まれており、ほとんどがこの時期のものと考えられる。また、１点だけではあるが、（163）には宝暦８年（1758）の紀年銘がある。これはさらに矮小化が進んでいる。

基壇（第28図）

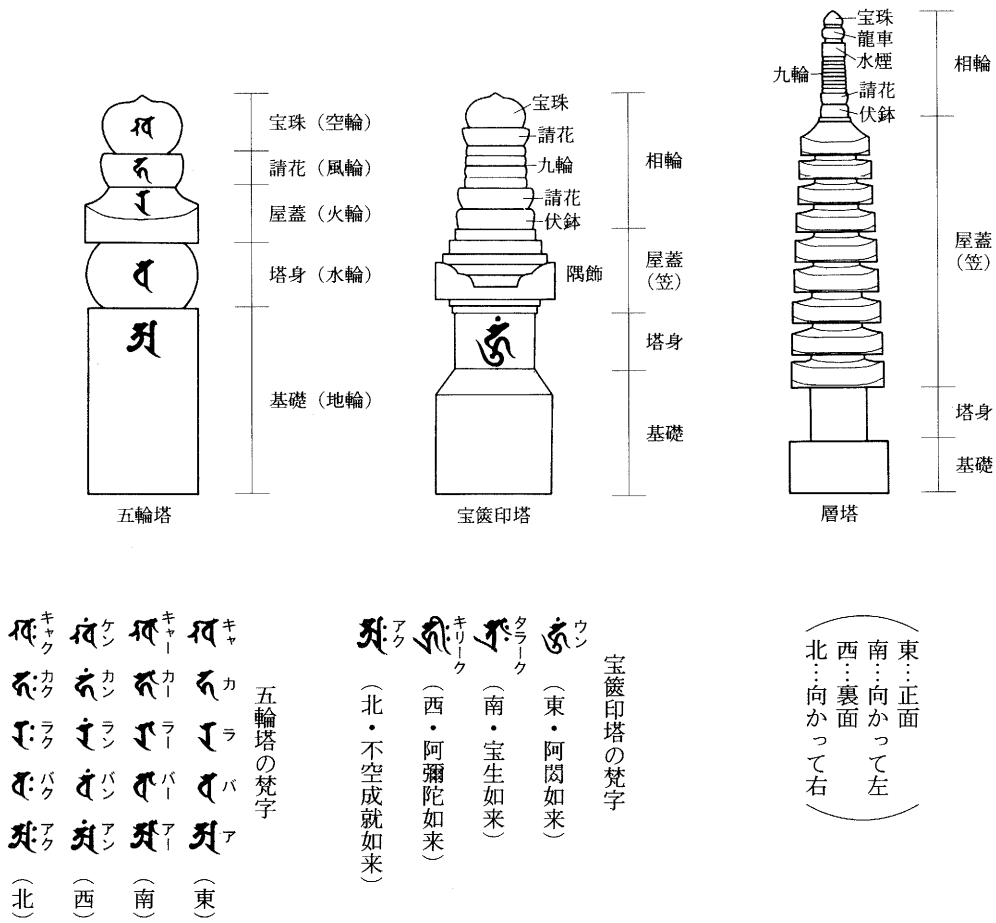
砂岩製で２点（172・175）ある。上面には反花が刻まれている。ほぞ穴はない。差し込まずに据え置く型式のものである。

板石（第28図）

砂岩製のものが２点（173・174）と花崗岩製のものが１点（176）ある。（176）の上面は中央部がわずかに凹んでいる。　（中尾）

（註１）西田孝司氏（園田学園女子大学非常勤講師）に時代ごとに矢穴をあける鏨の単位が存在し、また様相が異なることをご教示いただいた。

（註２）片山一道氏（京都大学霊長類研究所教授）に鑑定いただいた。



第29図　石造物細部名称図

	全高	全幅	奥行	相輪	屋蓋（笠）				塔身	基礎			石材	備考
					高	上端長	最大幅	下端長		高	上端長	下端長		
第15図　22	18.2	26.0	25.0		18.2	12.6	25.7	15.3					砂岩	
〃　23	19.9	25.2	23.7		19.9	11.9	25.2	13.2					〃	
〃　24	20.1	24.7	22.6							20.1	13.0	24.4	〃	慶長5(1600)
第24図 142	22.1	22.2	21.6		22.1	9.2	22.2	11.7					〃	
〃　143	27.5	25.3	24.7							27.5	15.9	24.8	〃	慶長19(1614)

第２表　石造物計測表（別石宝篋印塔）

	全高	全幅	奥行	空輪		風輪			火輪	水輪	地輪			石材	備考
				高	最大径	高	上端径	下端径			高	上端長	下端長		
第24図 144	14.9	21.7	21.4								14.9	21.0	21.1	砂岩	
145	16.8	8.2	8.2	(8.3)	8.0	6.3	8.1	5.4						〃	

第３表　石造物計測表（別石五輪塔）

	全高	全幅	奥行	相輪		屋蓋（笠）				塔身			基礎		石材	備考
				高	下端径	高	上端長	最大幅	下端長	高	上端長	下端長	高	下端長		
第16図 26	(12.2)	(11.6)	(10.9)	(12.2)											砂岩	
〃 27	(21.3)	(14.4)	(15.5)	(9.4)	10.3	(11.9)	11.2	(14.3)							〃	
〃 28	(30.0)	(16.7)	(17.1)	(17.6)	11.0	(12.4)	(12.9)	16.7							〃	
〃 29	(45.4)	17.2	16.9	(8.0)	10.1	9.5	10.1	(16.9)	13.9	8.3	12.1	11.6	19.7	16.6	〃	
〃 30	(39.9)	17.3	16.8			12.4	11.9	16.7	15.0	9.1	13.7	13.8	18.5	16.7	〃	慶長
〃 31	(49.3)	17.6	15.7	(12.1)	11.0	11.6	11.3	17.1	12.6	8.2	11.3	11.3	17.5	15.2	〃	
第17図 32	(28.7)	(15.4)	(14.1)	(8.4)	8.8	10.2	8.8	15.4	13.1	(9.0)	12.1				〃	
〃 33	(24.9)	(15.6)	(14.6)	(2.7)	10.4	11.5	10.6	(15.5)	11.6	(9.3)	10.1				〃	
〃 34	(13.5)	(12.1)	(12.5)							(9.3)		(10.3)	(3.2)		〃	
〃 35	(54.1)	17.2	15.6	(11.3)	11.5	8.7	11.5	14.7	12.9	9.8	12.1	12.0	24.3	17.2	〃	慶長19(1614)
第20図 57	(13.5)	(9.8)	(9.9)	(13.5)											〃	
〃 58	(9.9)	(10.6)	(10.6)	(9.9)											〃	
第25図 146	(10.0)	(10.6)	(10.0)	(10.0)											〃	
〃 147	(13.7)	(10.8)	(10.7)	(13.7)											〃	
〃 148	(14.0)	(11.5)	(11.7)	(14.0)											〃	
〃 149	(19.1)	(11.1)	(10.2)	(19.1)											〃	
〃 150	(19.7)	(15.3)	(15.0)	(1.6)	10.0	9.2	11.1	15.3	11.9	(8.2)	10.4				〃	
〃 151	(43.2)	16.7	17.0	(9.1)	10.2	9.5	10.6	16.3	12.4	8.5	10.9	10.7	16.2	16.0	〃	
〃 152	(45.1)	16.1	15.5	(7.5)	9.7	9.8	9.7	16.0	12.4	7.5	11.5	11.8	20.4	15.4	〃	
〃 153	(42.7)	17.5	16.5	(3.1)	11.2	10.7	11.2	17.3	14.3	9.8	13.2	14.5	19.1	17.1	〃	慶長19(1614)

第4表　石造物計測表（一石宝篋印塔）

	全高	全幅	奥行	宝珠（空輪）			請花（風輪）			屋蓋（火輪）				塔身（水輪）				基礎（地輪）			石材	備　考
				高	最大径	下端径	高	上端径	下端径	高	上端長	下端長	軒端高	高	上端径	最大径	下端径	高	上端長	下端長		
第17図　36	(22.1)	(14.7)	(15.0)						7.7	8.9	7.7	14.3	4.5	9.4	12.4	15.0	10.8	(3.8)	(12.6)		砂岩	
〃　37	(31.8)	(14.7)	(14.5)							(8.3)		14.1	(3.9)	7.7	12.1	14.5	11.8	(15.8)	13.9		〃	慶長19(1614)
〃　38	(37.2)	(14.7)	(14.3)							8.8	(9.0)	14.0	(4.9)	8.4	12.1	14.1	11.7	19.9	13.5	13.7	〃	慶長 9 (1604)
〃　39	(44.4)	(14.6)	(14.1)						7.8	8.0	7.8	14.2	6.3	7.8	11.8	14.0	10.6	28.6	13.0	14.3	〃	
第26図　154	(59.2)	(23.2)	(22.1)	17.4	17.3	12.0	10.3	18.3	14.4	14.5	14.4	22.4	(9.3)	(17.0)	18.0	22.3	(15.0)				〃	
〃　155	(14.5)	(12.3)	(12.2)	(13.3)	12.3	8.3	(1.2)														〃	
〃　156	(19.5)	(13.1)	(12.5)	(10.3)	12.5	10.3	7.1	12.2	11.2	(2.2)	11.2										〃	
〃　157	(14.7)	(11.4)	(11.0)	(7.3)	9.8	7.7	4.8	10.7	8.4	(2.6)	8.4										〃	
〃　158	(14.1)	(10.9)	(11.0)	(8.1)	10.5	7.5	6.0	10.4	8.2												〃	
〃　159	(8.3)	(10.9)	(10.4)	(1.7)		7.9	6.6	10.5	6.4												〃	
〃　160	(22.3)	(19.3)	(18.4)						9.8	10.9	10.7	18.5	7.1	11.4	15.1	19.2	13.6				〃	
〃　161	(18.6)	(14.3)	(14.0)											(1.3)			8.9	13.0	(12.2)	(12.5)	〃	
〃　162	(24.8)	(15.2)	(14.8)											(0.9)			10.8	23.9	14.1	14.9	〃	慶長19(1614)
〃　163	(21.1)	(10.0)	(9.2)															21.1	(8.8)	(9.2)	〃	宝暦 8 (1758)
第27図　164	(25.7)	(11.8)	(11.9)	(8.3)	10.6	8.9	5.2	10.4	9.3	6.9	9.0	11.6	5.4	(5.3)	9.9	10.6	(9.5)				〃	
〃　165	(30.5)	(14.0)	(13.9)	(8.9)	10.3	9.2	4.8	10.3	9.1	8.7	9.1	13.4	7.3	(8.1)	11.9	14.0	(11.7)				〃	
〃　166	(29.3)	(16.5)	(16.1)	(12.6)	14.2	11.5	6.4	14.2	12.9	7.9	12.9	(12.9)	(6.8)	(2.4)	(11.3)						〃	
〃　167	(46.1)	13.1	12.8	(6.8)	9.0	7.1	3.7	9.3	8.1	6.5	8.1	12.4	(3.4)	7.5	10.4	12.8	10.4	21.7	12.5	11.8	〃	慶長18(1613)
〃　168	(20.2)	(11.4)	(10.7)						6.4	6.2	6.4	10.7	5.2	5.3	9.7	10.6	9.5	(8.7)	10.6		〃	
〃　169	(31.7)	(13.9)	(13.4)	(7.4)	10.2	7.5	6.1	10.6	8.4	9.4	8.4	13.3	(6.2)	7.9	10.4	12.7	10.5	(1.0)			〃	
〃　170	(30.5)	(15.9)	(14.4)				(0.6)		10.1	6.6	10.1	14.5	(4.0)	7.2	13.6	15.9	13.7	16.1	15.2	(14.1)	〃	
〃　171	(58.2)	18.0	16.5	(9.7)	12.0	9.6	6.3	13.1	12.6	7.8	11.9	16.7	(4.2)	11.9	14.6	16.9	14.2	22.6	16.4	16.3	〃	

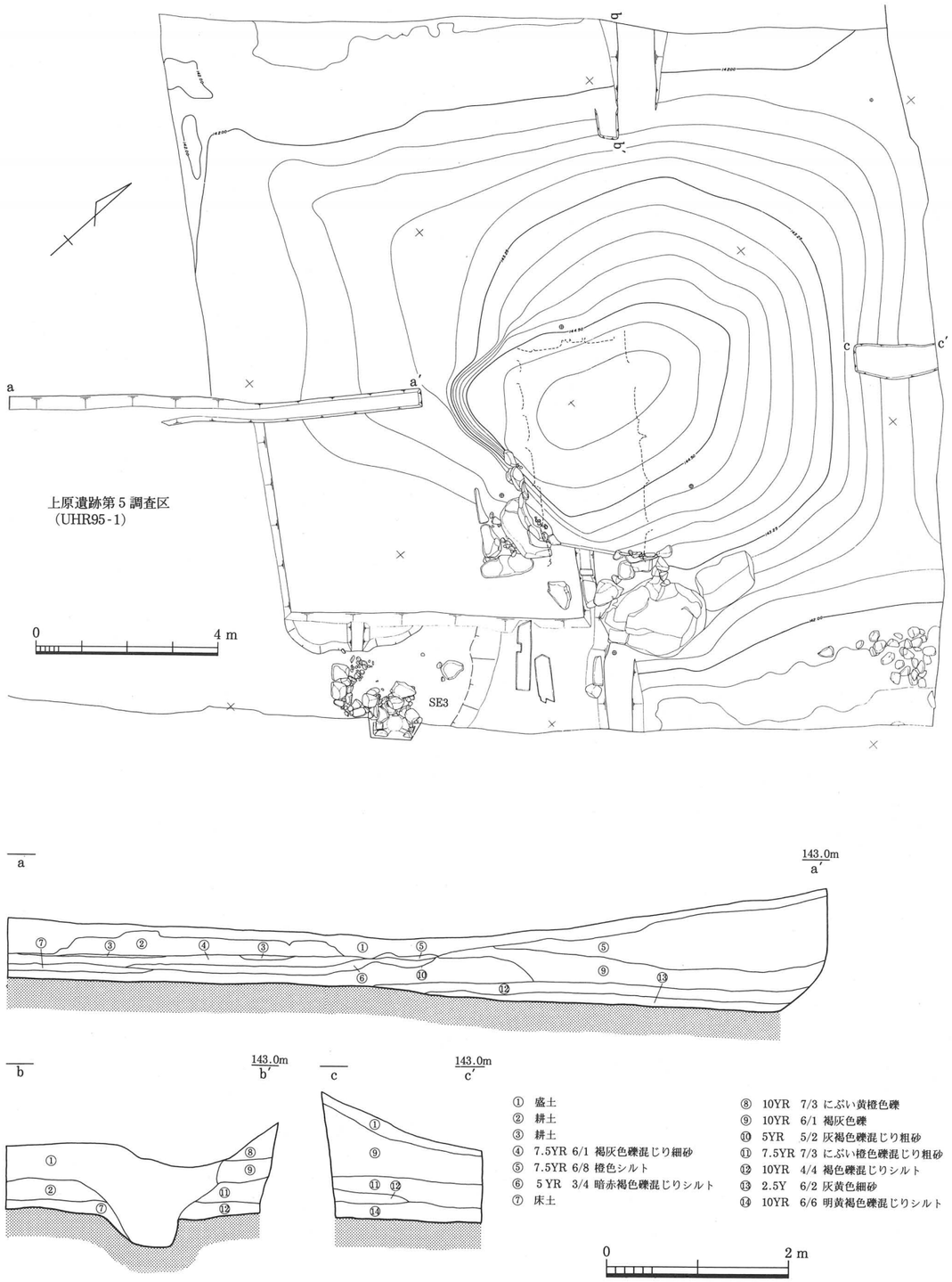
第５表　石造物計測表（一石五輪塔）

	全高	全幅	奥行	基　壇			石材	備　考
				高	上端長	下端長		
第15図　25	8.9	28.6	29.0	8.9	20.9	27.5	砂岩	基壇（反花）
第28図 172	9.5	21.9	22.4	9.5	15.2	21.0	〃	基壇（反花）
〃　173	9.5	24.7	23.7				〃	板石
〃　174	5.8	19.9	20.4				〃	板石
〃　175	15.1	33.4	32.9	15.1	24.6	31.5	〃	基壇（反花）
〃　176	12.3	30.6	(26.3)				花崗岩	板石

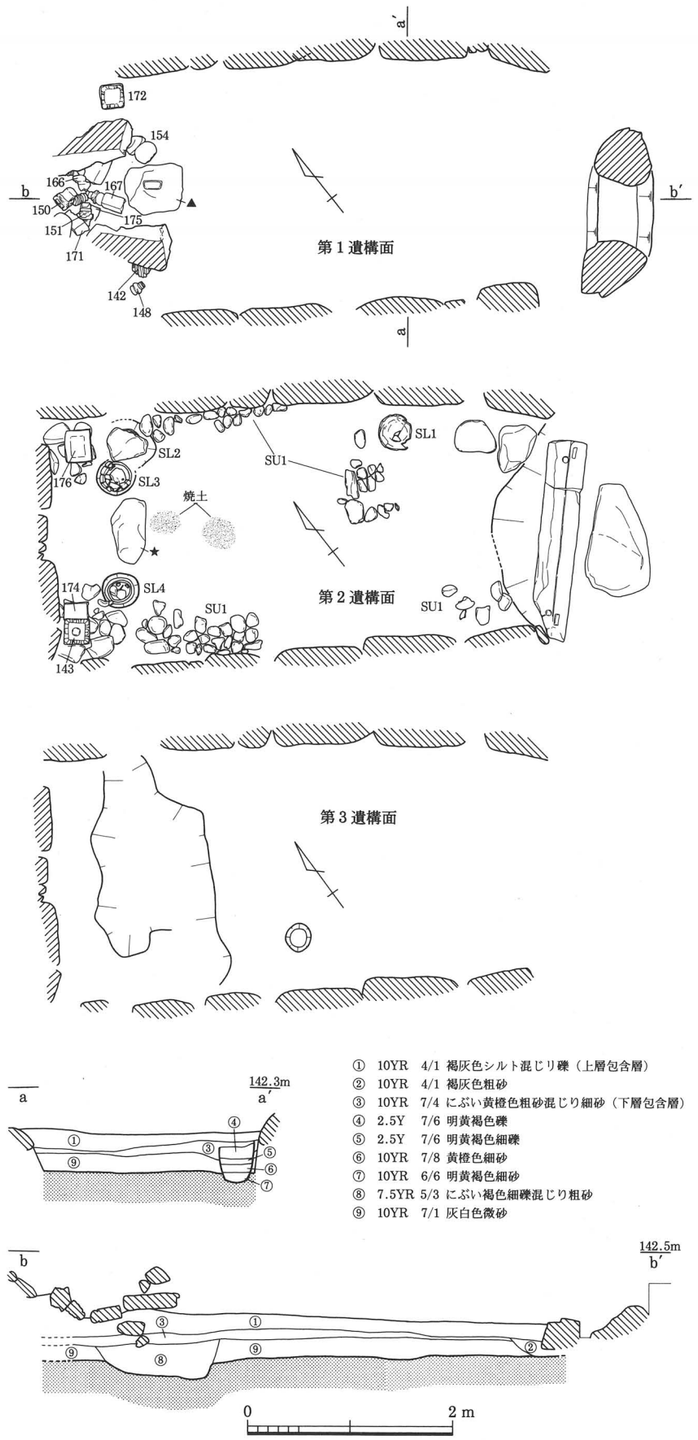
第６表　石造物計測表（基壇・板石）

	全高	一辺	笠				石材	備　考
			高	上端長	下端長	軒端高		
第18図　40	9.8	33.1	9.8	16.2	32.8	3.3	砂岩	
〃　41	13.2	35.6	11.8	18.8	35.0	5.1	〃	
〃　42	12.9	36.4	11.8	19.6	36.1	(4.7)	〃	
〃　43	12.7	37.3	11.5	20.3	36.9	5.3	〃	
〃　44	12.0	38.1	11.8	21.4	37.8		〃	
〃　45	14.6	38.4	12.9	21.4	38.4	5.7	〃	
〃　46	14.1	39.4	12.3	21.9	38.4	5.6	〃	
〃　47	14.3	40.9	13.5	23.0	40.1	(5.9)	〃	
〃　48	13.2	36.1	13.2	19.8	35.8	(5.8)	〃	「九」
〃　49	16.2	(25.1)	16.2	(16.1)	(23.9)	8.4	〃	「六」
〃　50	16.3	41.1	16.3	24.9	39.9	7.4	〃	「三」
〃　51	17.6	39.8	17.6	24.9	39.5	(9.2)	〃	「一」
〃　52	14.9	38.2	14.9	20.3	38.0	(4.8)	〃	
〃　53	18.8	39.6	18.8	23.5	38.7	(9.3)	〃	

第７表　石造物計測表（層塔）



第30図　墳丘平面図（1/120）及び土層断面実測図（1/60）



第31図　石室内遺構実測図（1/60）及び土層断面実測図（1/60）

第3章　まとめ

第1節　上原遺跡の調査結果

調査の結果、以下のとおり各時代ごとに成果があった。

・縄文時代

縄文土器の出土量は僅かではあるが、1994年度の第4調査区でも縄文時代後期の遺構が検出されており、位置的にこれらに近接することから、同一の分布範囲を構成しているものと考えられる。

・古墳時代

上原遺跡の1985年度から1997年度にかけての発掘調査では出土しなかった古墳時代の須恵器が本次調査区の東側（塚穴古墳の西側）で若干の散布が認められた。1995年の発掘調査でも第5調査区の東側（塚穴古墳の南側）の包含層から須恵器の破片が若干が出土した。調査当時は若干の出土量であったので言及しなかったが、本次調査の須恵器とともに塚穴古墳の周囲に出土位置が限定されることに注目すれば、微証ではあるものの、現在の塚穴古墳が、古墳時代に構築されていた原位置、もしくはそれに近い位置に再構築されていることを示しているのかも知れない。現時点でこのことは、塚穴古墳再構築説に関する唯一で、最有力の参考資料としてみることができる。

・中世

中世については多数のピット群が検出された。復元できた掘立柱建物は僅かであったが、既往の上原遺跡の調査結果と合わせて、今池が存在していた谷の東側には遺構が集中することが改めて確認できた。（鳥羽）

参考文献

『河内長野市遺跡調査会報XV　上原遺跡』　河内長野市遺跡調査会　1997年

第2節　塚穴古墳の調査結果

調査の結果、塚穴古墳についての多くの成果を得ることができた。項目毎に列挙すると以下の通りである。

・墳丘土について

本次調査以前から塚穴古墳が解体後、再構築されていると考えられていることから、その事実と年代に確認するため、墳丘封土に設定したトレンチの土層観察、遺物の確認を行った。その結果、墳丘の基底部の第⑤層（第30図）で近世と見られる平瓦片が見られたため近世に墳丘が構築されたことが確認できた。しかし、解体された時期は確認できなかった。また、古墳の周辺の包含層から古墳時代の須恵器片が出土しているが、当時に構築された盛土や地山を削り出すなどの痕跡は検出されず、当初の位置で忠実に再構築しているかはわからなかった。但し、トレンチ内の平面及び断面観察の限りでは、平坦な地山面に構築されていることが観察された。

・石室について

既往調査で石室の一部の構造が明らかにされていたが、本次調査では基本的な構造が明らかにされたことは大きな成果であった。特に、石材の積み方、架梁方法など再構築された当時の人々の石室構造への認識には興味深いものがある。石材は一部に矢穴が残る割石が用いられていることから、再構築時には不十分な石材量しか用意されなかったことが考えられる。仮に、石室の再構築が原寸に近い規模で行われたならば、市域で現存、あるいは既往調査で確認し、またすでに消滅した横穴式石室をもつ古墳の中では比較的規模の大きい石室を備える古墳であった可能性がある。

本次調査以前の塚穴古墳の性格についての認識は、古墳の東側を市内の七つ辻から天野山金剛寺に至る天野街道（河泉街道）が通っていることから、必然的に古墳の墳丘の周囲に墓碑や供養碑のため建立された別石、もしくは一石造りの五輪塔・宝篋印塔、地蔵菩薩像、十三仏尊像などの信仰対象が混然と集められ、祀られているというものであった。しかし、本次調査では石室内で墓石のみならず火葬骨を納めた蔵骨器などを検出したことから、具体的に墓地としての性格を初めて確認できた。全国的に古墳の石室を再利用した例は多く、主に小祠や仏堂、墓地、護摩堂的仏堂等として利用されたものに分類される。(註1～5) いずれも古墳の横穴式石室内を後世に再利用しているものであるが、一旦解体し再構築された経緯を持つ古墳は他に例を見ない。

地元では大坂城築城の際に石垣に用いる石を確保するため石室を解体したが、疫病が流行り元に石を戻したという伝承が残っている。仮に、石室再構築が大坂城に関係するもの

であっても、石室側壁に慶長19年の銘を持つ五輪塔の地輪が組み込まれていたこと、石敷きの下の粘土貼床から寛永通宝の文銭が出土していることなどから、豊臣期大坂城とは考えにくく、徳川期大坂城だとしても初期の大規模な普請に伴うものではないと思われる。

・石室内の遺構について

今次調査では積極的利用がうかがえる遺構面は２面検出した。上層遺構面（第31図、第①層褐灰色シルト混じり礫層上）の形成時期は同層中に宝暦８年の銘が刻まれた一石五輪塔があることから1758年を上限とする時期が考えられる。この層中には破損した石造物が多数あり、後述する下層遺構面において石室内が墓地として利用され、次第に廃れた時期、もしくは廃絶された時期の整地層であると考えられる。しかしこの遺構面に階段として利用されたものと考えられる柱状石や、香などによって生成されたと考えられる灰がほぼ床一面で多量に検出されたことから、整地後も石室内は信仰の場として続けて利用されたと考えられる。

下層遺構面（第31図、第③層にぶい黄橙色粗砂混じり細砂層上）の形成の時期は石敷きの目地から寛永通宝（第２期の新寛永）が出土していることから、1668年を上限とする時期が考えられる。また、ＳＵ１は検出状況から、石室と同時期に墓地の床として設置され、相次ぎＳＬ１からＳＬ４の墓が構築された可能性が高い。すると、石室の再構築の目的の一つが、墓地の構築であったことが考えられる。

・石造物について

石造物の出土した地点は石室内、墳頂部、墳丘裾部に分類できる。多数の出土量があったが、欠損品が多かった。だが欠損した部分が殆ど出土しなかったことから、石造物は一旦他所で安置された後集められ、古墳とその周囲に集祀された可能性がある。このうち法号が確認出来たものは、戒名と位号で構成されるものである。禅定門、禅尼、信士、いずれも当時の仏教徒の庶民への法号である。しかし今日では、禅定門、禅尼の法号は殆ど用られない。(註6) これらは当市域が平安時代以来、真言系寺院の宗教活動が盛んな歴史的環境にあり、また当古墳が天野山金剛寺（真言宗御室派）へ続く街道沿いに位置すること、石造物に記された法名の構成から、真言系の作法により開眼供養された可能性が高い。(30)については位号に阿闍梨と記されていることから、受戒、加行、伝法灌頂などを修めた一人前の僧侶の墓石であることがわかる。だが、僧名が判明しているにも関わらず、一般民衆と塚穴古墳に合祀された点は不可解である。なぜならば、一般的に僧侶の墓は、自坊や関係寺院の境内、もしくは寺院の管理する墓地に歴代住職らと共に寺院の興隆に尽力した先師の尊霊として、寺院の存在する限り、後世まで丁重に祀られる。にも関わらず、塚穴古墳に安置されたのは塚穴古墳の仏事に従事したため、あるいは伝承のような疫病によって病死したため、例外として一般民衆と共に合祀されたのかもしれない。

また、大半の石造物は紀年銘をもち、石室内で出土した最も古い年代を持つ慶長18年（1613）の石造物（167）をもって石室が墓地として利用され始めた時期の上限時期として捉えられる。しかし、石室の解体時期、および再構築時期を示す資料にはならない。

特に、砂岩製の一石宝篋印塔の出土例については、南河内地区では当市以外に現在のところ未報告である。しかし、現在も信仰されている、同型式のものが塚穴古墳の南西1㎞に位置する上原町墓地（当市上原町所在。上原町・野作町・高向地区の共同墓地）で4基（いずれも完形ではない）確認されている。(註7) 紀年銘の確認できるものは1基のみであるが、慶長年間であることが判明している。上原町墓地には現在阿弥陀堂と呼ばれる仏堂があり、文化9年（1812）に描かれた「上原村絵図」（上原町区所有）では阿弥陀寺として描かれている。(註8) 寺の縁起が塚穴古墳の再利用開始時期まで遡るものであれば、塚穴古墳以外に分布が確認されていない一石宝篋印塔が祀られていること、同寺が塚穴古墳に近接していることなどから、墓地の法事や管理は同寺が行ったと考えられる。さらに塚穴古墳に祀られる以前に安置されていた場所が先述のようにあったとすれば、上原町墓地であった可能性が考えられる。

最後に仮説ではあるが、宝篋印塔は占める割合が総出土数41基中26基、うち一石宝篋印塔が18基を占め、このうち慶長年間を命日として刻まれたものが複数あることから、次のことが考えられる。宝篋印塔は「一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼」（以下、宝篋印陀羅尼と略す）に基づき造塔されたものであり、その説く内容と由来は、書写、読誦、また造塔することにより、罪障消滅や寿命長遠などの功徳があるという信仰があり、特に堕獄した亡者を救うとされている。(註9) このことから真言宗の場合、いつの時期からか対象となる墓石の形式を問わず、納骨時に墓前にて諸真言や他の陀羅尼などと合わせたり、諸真言と合わせて宝篋印陀羅尼のみを読誦する次第を用いる寺院や僧侶が多く、現在でもこのような次第にしたがって法事が行われている。(註10) 以上のような現在の仏前供養の次第から、一石宝篋印塔は施主等が死者に対する成仏を切実に願った結果、この時期に一般的な墓石である五輪塔や板碑を用いずに宝篋印塔を積極的に用いた可能性がある。あるいは、近世になると中世には見られなかった宝篋印陀羅尼が梵字や漢字に字訳され宝篋印塔に刻まれたものが増加するようになることから、(註11) 宝篋印陀羅尼と結び付いた信仰に何らかの変化が起こり、その影響が当地にも及んだことを示しているのかも知れない。

以上のように、塚穴古墳は唯一市内で見ることができる墳丘と横穴式の石室を持つ古墳であるという価値のみならず、近世の人々の精神、特に宗教観を多いに繁栄した記念物としてその価値は高いことが改めて確認された。本報告書をもって一応の調査は終了するが、未解明の部分が多いため、今後も引き続き各方面の教示、助言を求む。　（鳥羽・中尾）

（註１）「徳島県博物館紀要　第４集」　徳島県博物館　1963年

（註２）「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊　烏土塚古墳他」　奈良県教育委員会　1963年

（註３）「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　葛城・石光山古墳群」　奈良県立橿原考古学研究所　1976年

（註４）「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊　平群・三里古墳　付岡峯古墳・槇ヶ峯古墳」奈良県立橿原考古学研究所　1977年

（註５）「斑鳩・仏塚古墳発掘調査報告」　斑鳩町教育委員会　1977年

（註６）「法号戒名の付け方及び解説」　寺本良染　㈱松本日進堂　1996年

（註７）西山昌孝氏（千早赤阪村教育委員会）に所在についてご教示いただいた。なお、観心寺境内の墓地にも１基あることをご教示いただいたが、明らかに作風が異なり、また安置状況からは時期が特定できないため本報告の資料としては割愛した。

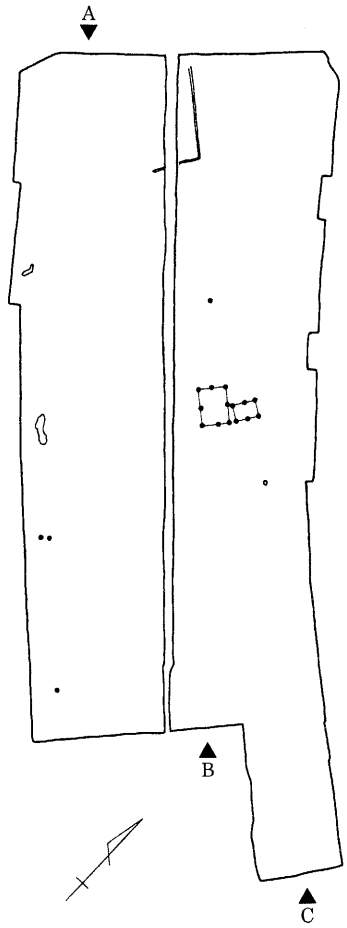
（註８）『河内長野市文化財調査報告書第７輯　河内長野の古絵図』　河内長野市教育委員会　1983年

（註９）「真言宗常用教典講義」　坂田光全　東方出版

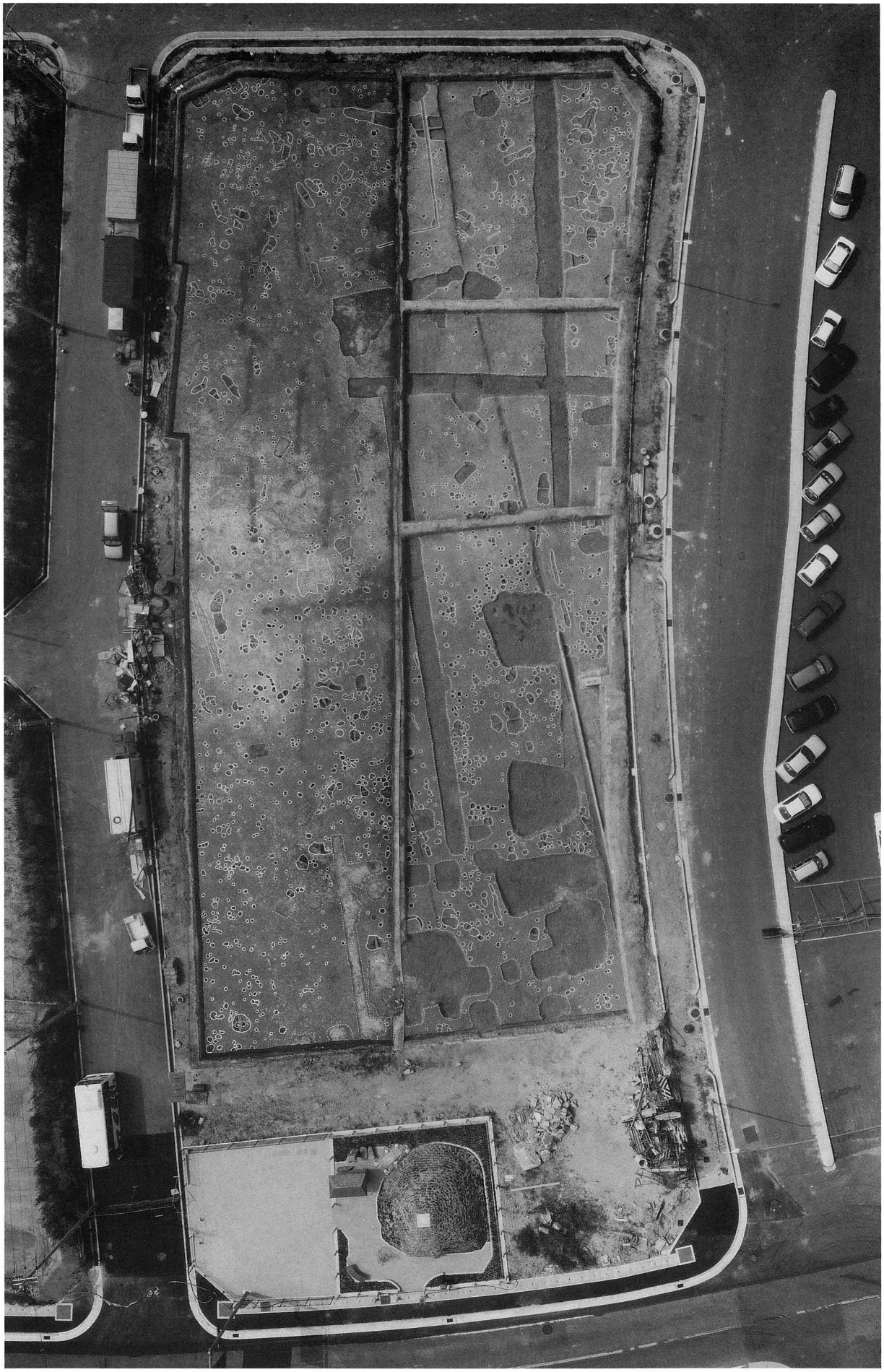
（註10）真言宗御室派では堀智範氏（天野山金剛寺座主）、高野山真言宗では、桑原弘海氏（堺市豊田所在　医王山福徳寺住職）、桑原法俊氏（同医王山福徳寺）、細原一義氏（堺市別所所在　金光山法華寺副住職）、川崎一洸氏（高野山大学院生）のほか寺院関係者からご教示いただいた。

（註11）『石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経（２）』　（「歴史考古学41号」　歴史考古学研究会）三木治子　1997年

図　　版



上原遺跡撮影地点

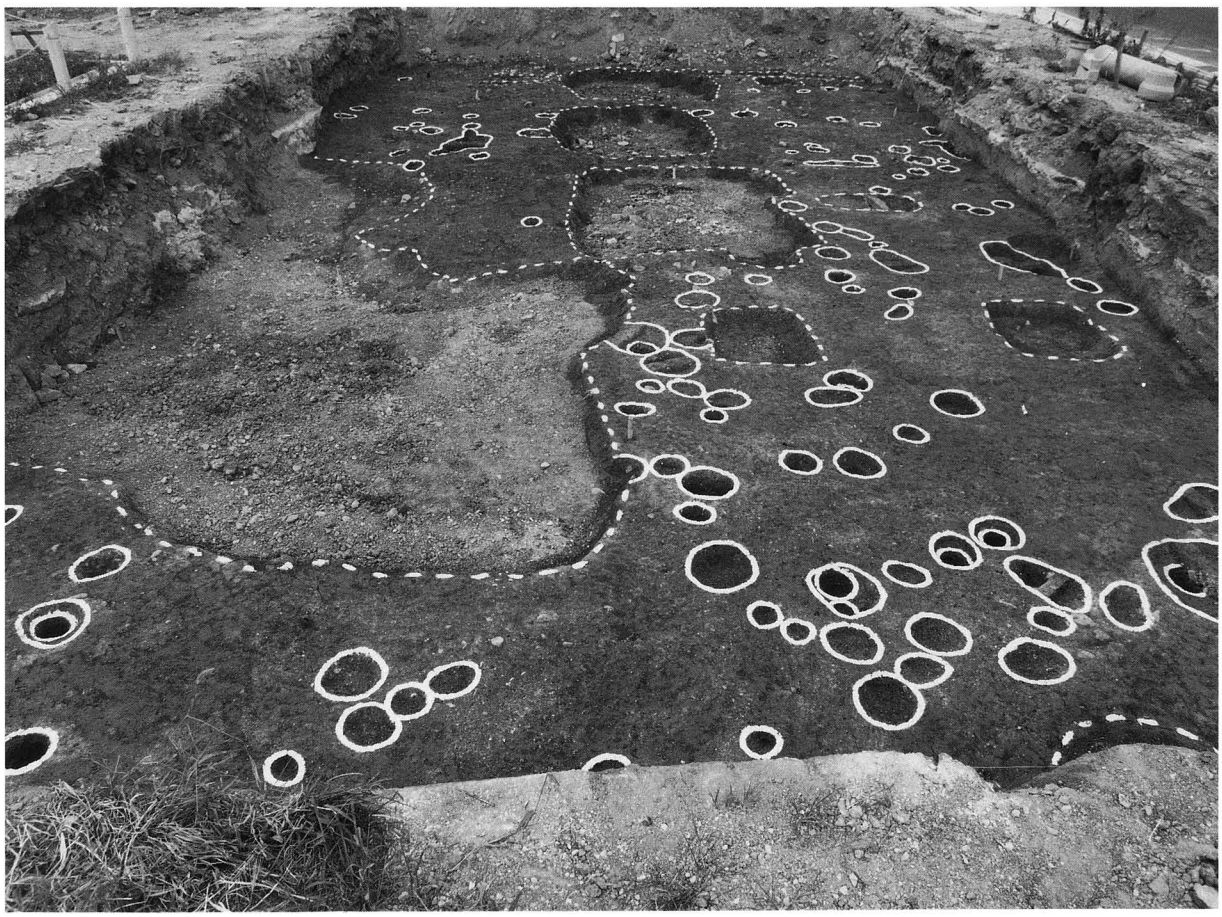


上原遺跡　調査区全景（真上から）

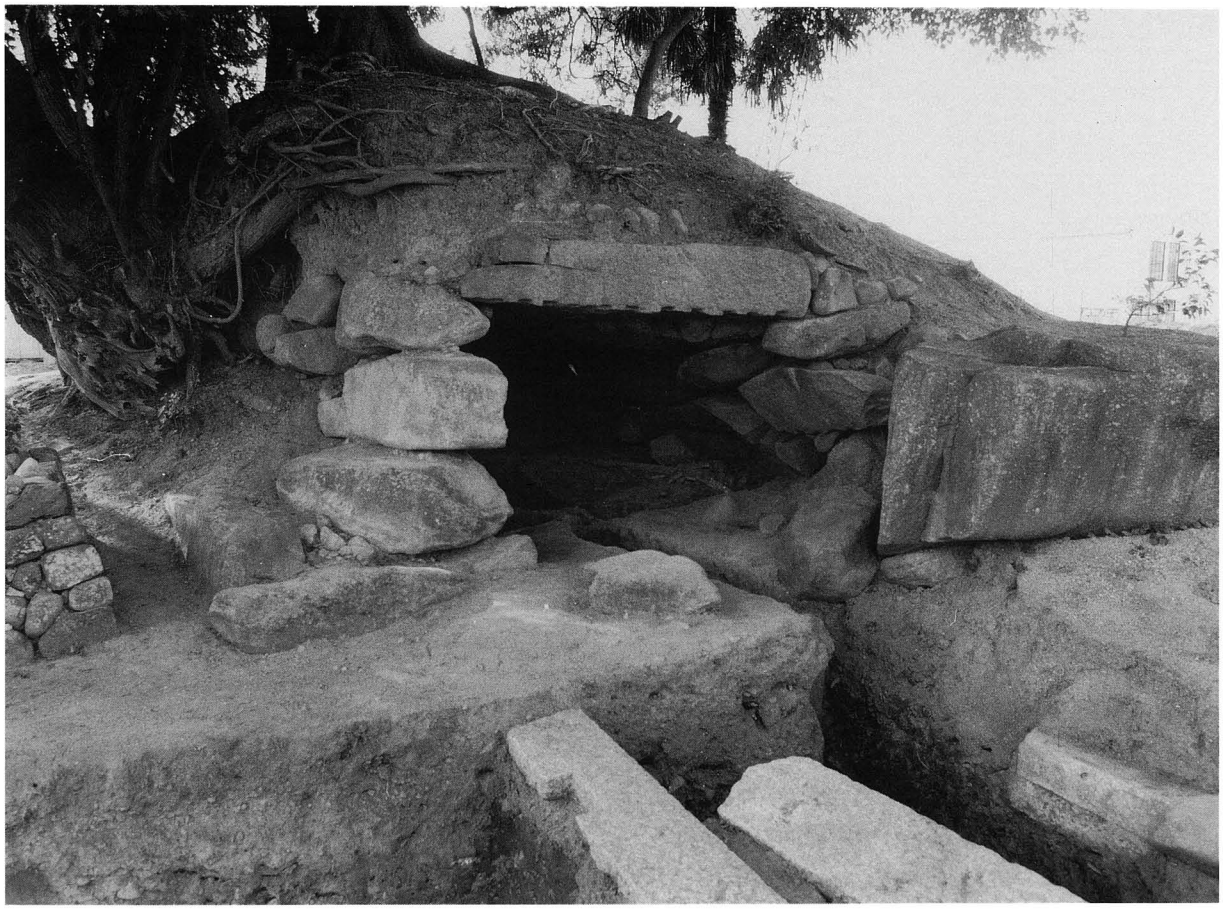
上原遺跡　調査区全景（Bから）

上原遺跡　調査区全景（Aから）

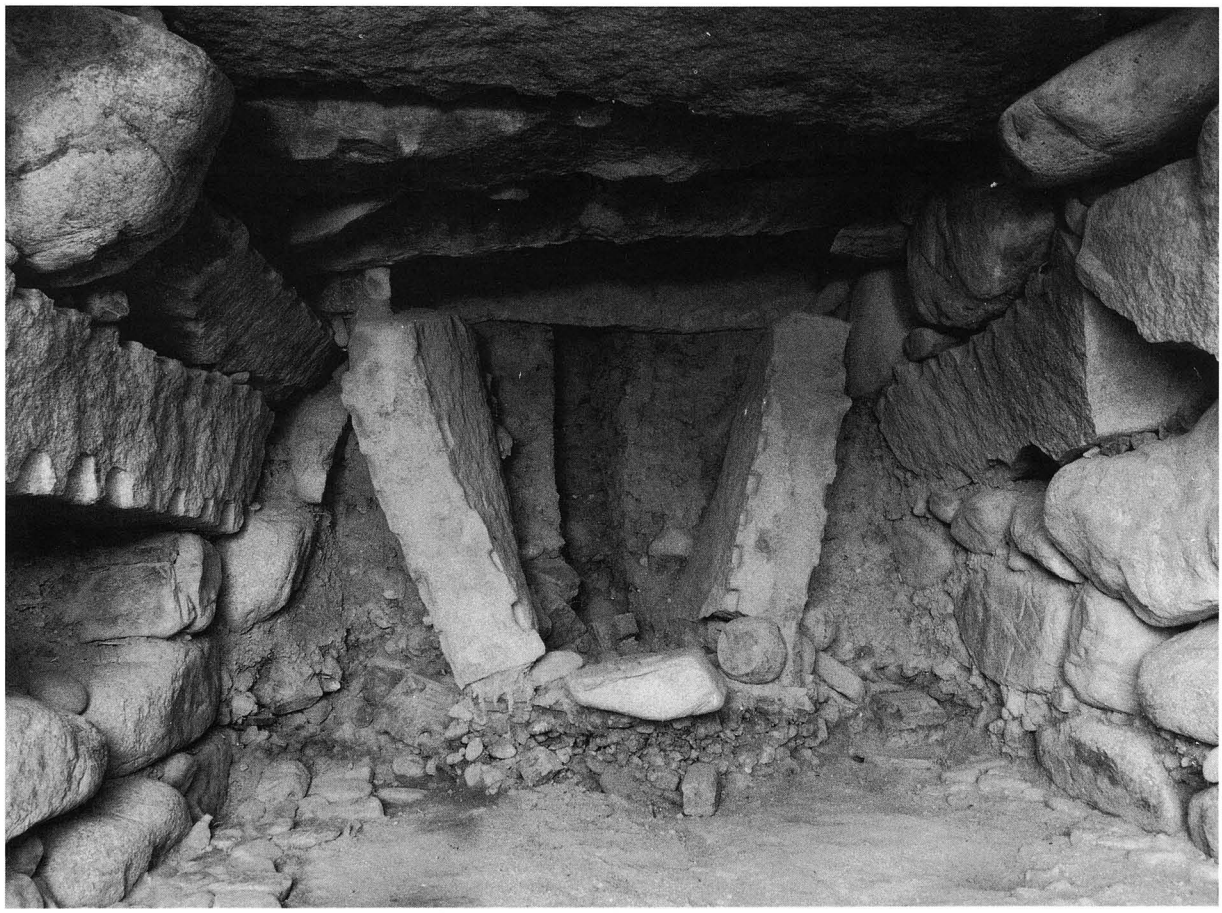
上原遺跡　ＳＢ１・２（西から）



上原遺跡　調査区全景（Ｃから）



塚穴古墳　全景（南から）



塚穴古墳　石室内部（開口部から）

塚穴古墳　石室内石造物出土状況

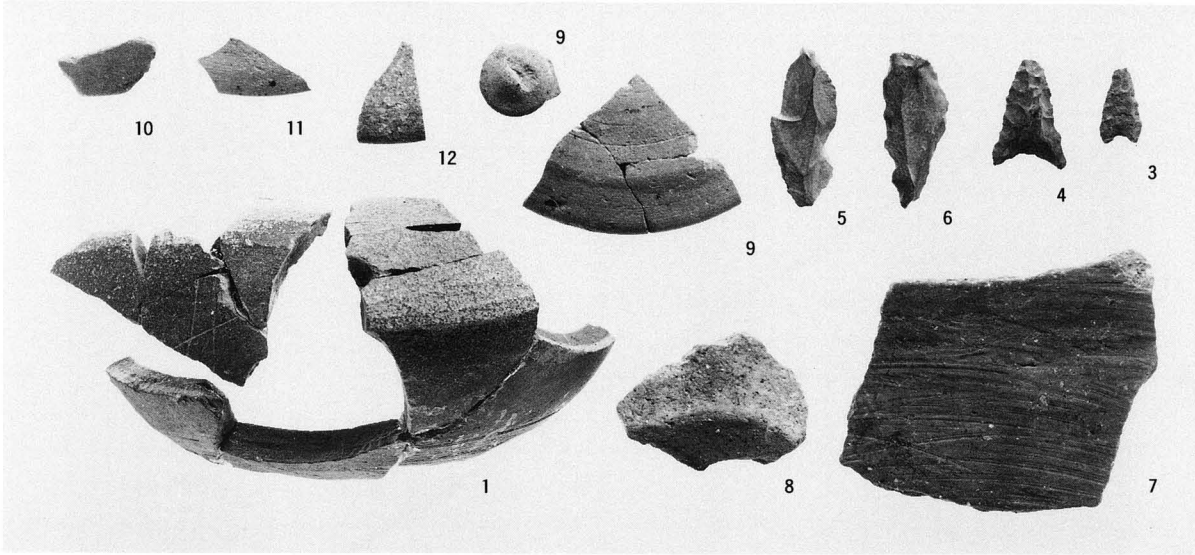
塚穴古墳　ＳＬ１・蜂巣石出土状況（南から）

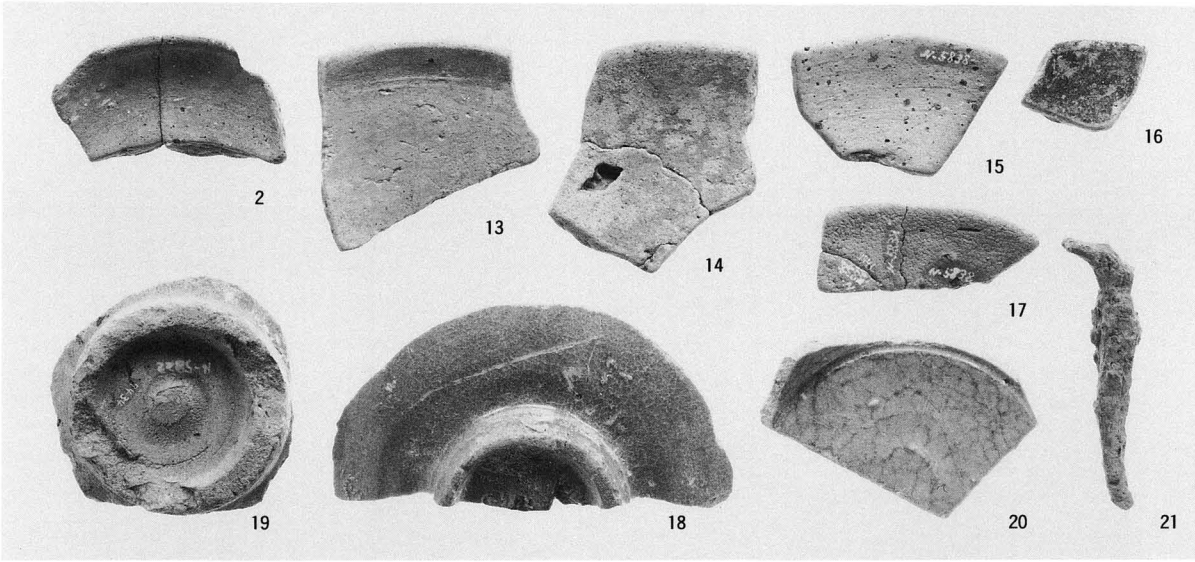
塚穴古墳　ＳＬ２出土状況（南から）

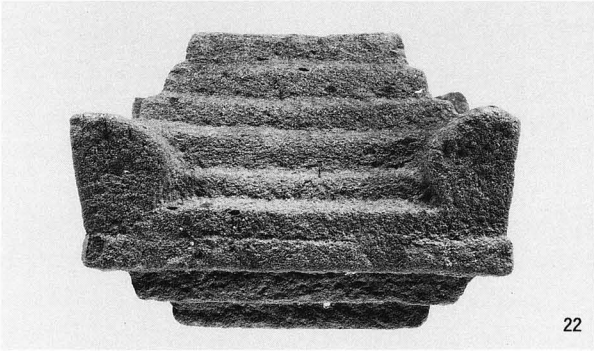
塚穴古墳　ＳＬ３・４出土状況（南から）

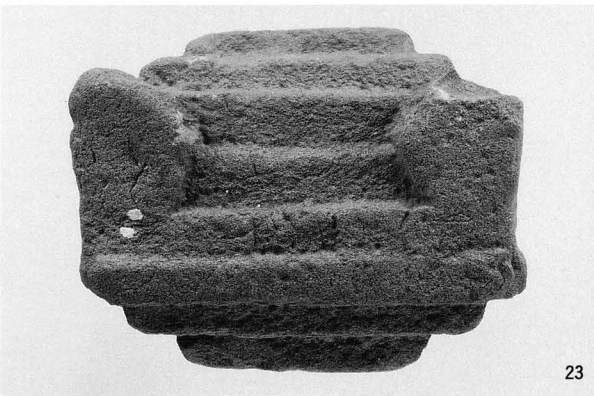
塚穴古墳　ＳＵ１（東から）

塚穴古墳　石室開口部（南から）

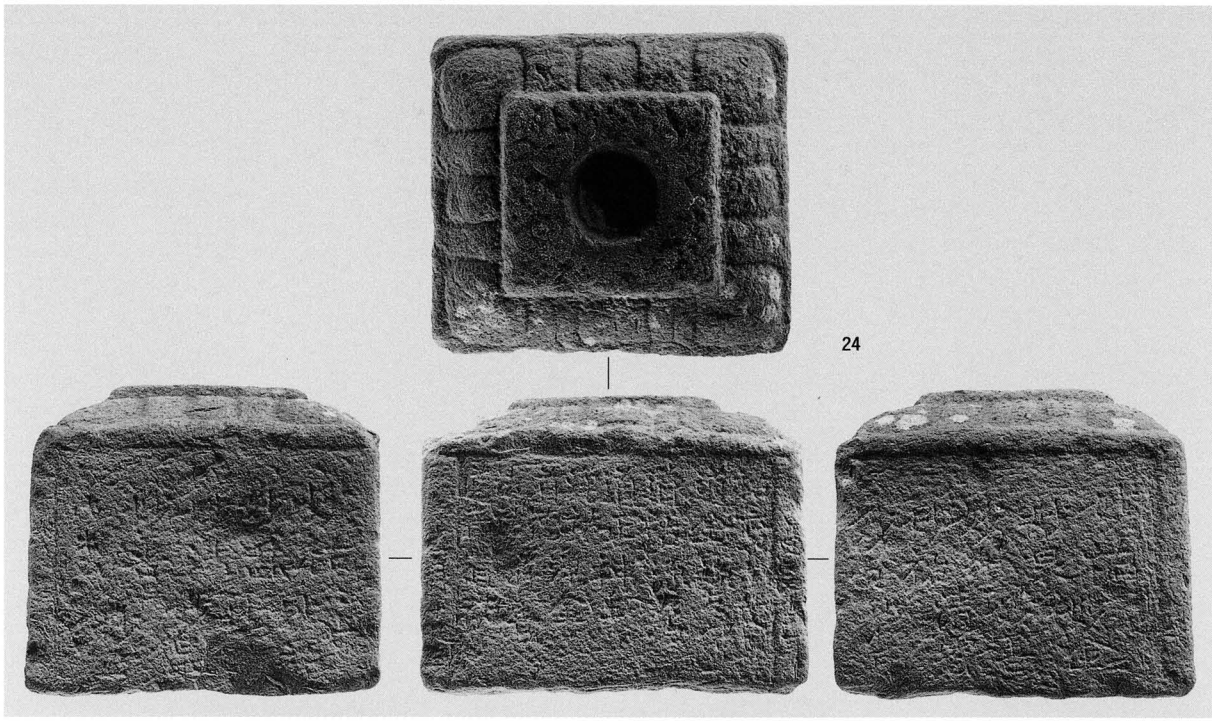


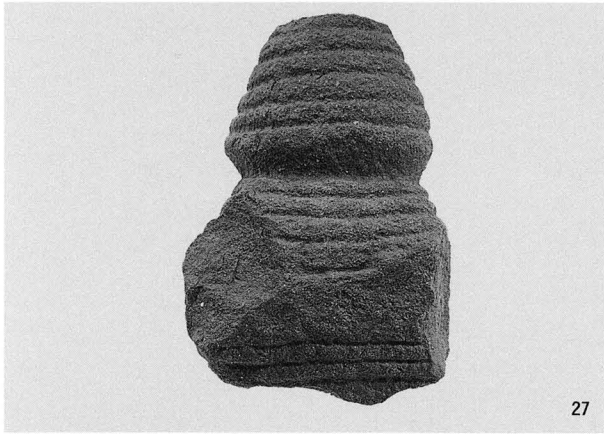


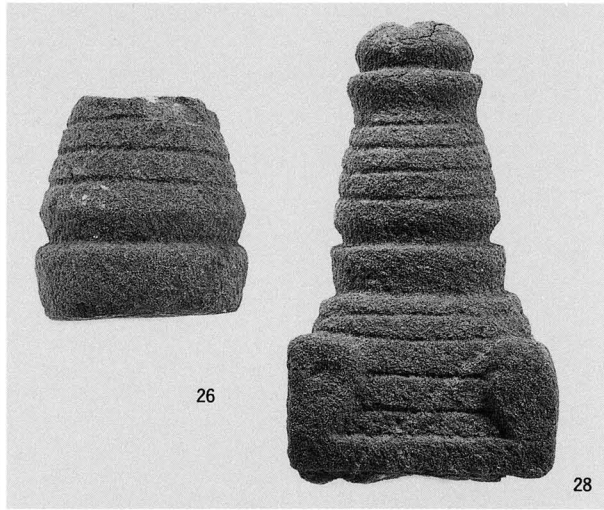


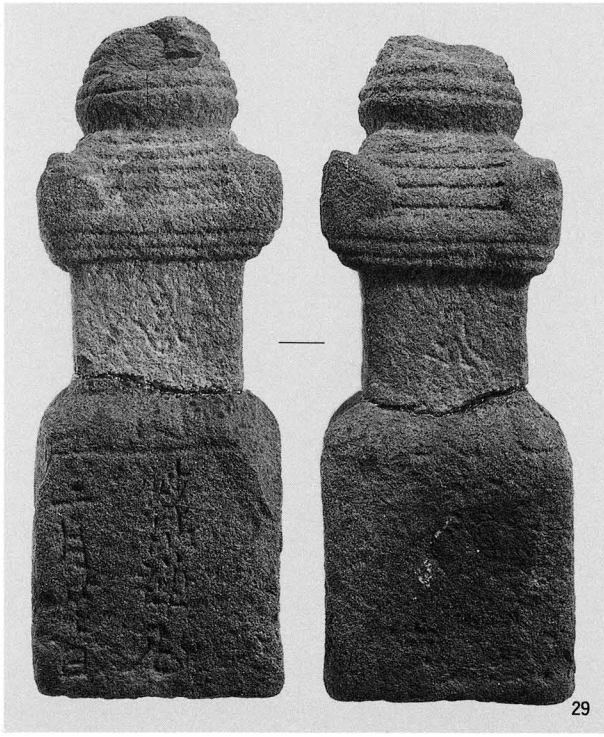


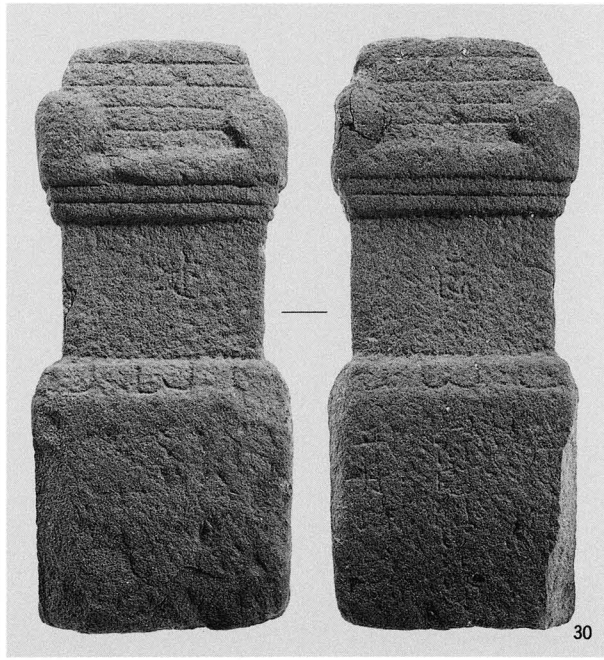
上原遺跡（ＵＨＲ97－１）　ＳＫ２（１）、ＳＰ１（２）、包含層（３～21）
塚穴古墳（ＴＡＫ95－１）　墳丘周辺採集石造物（22・23・25）



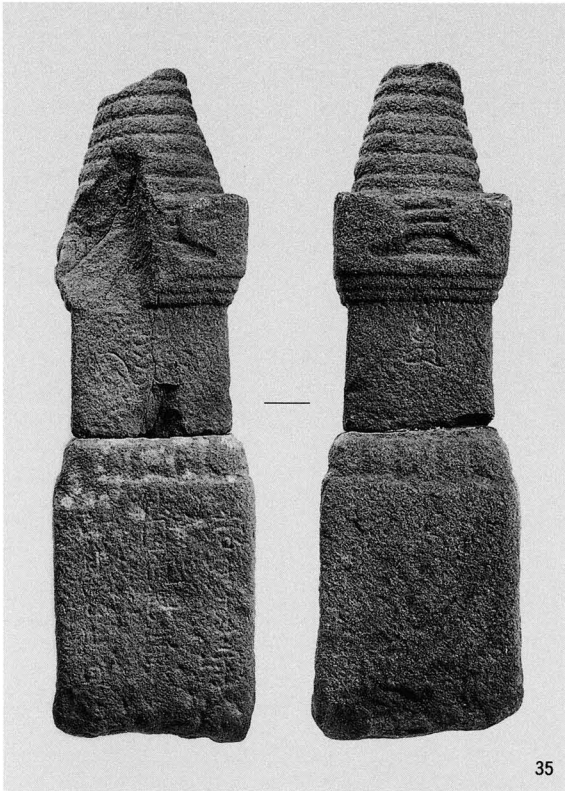


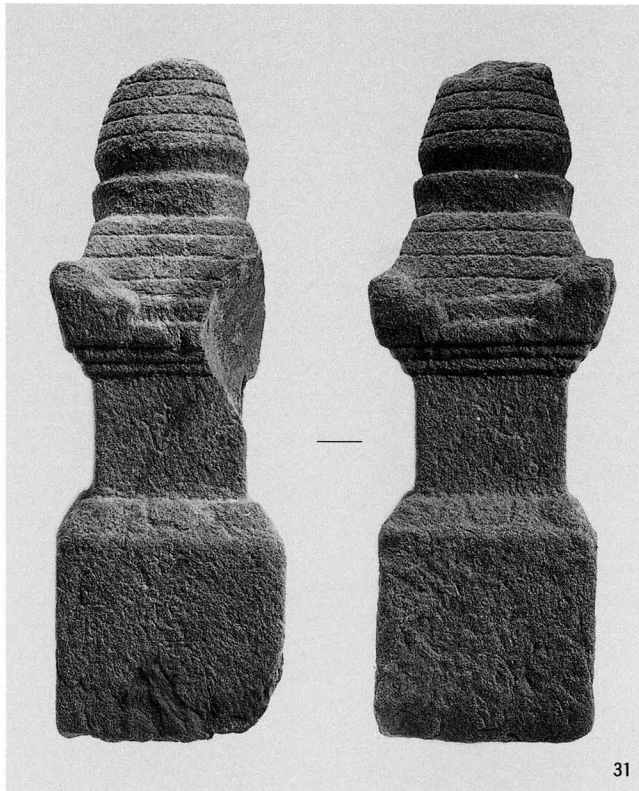


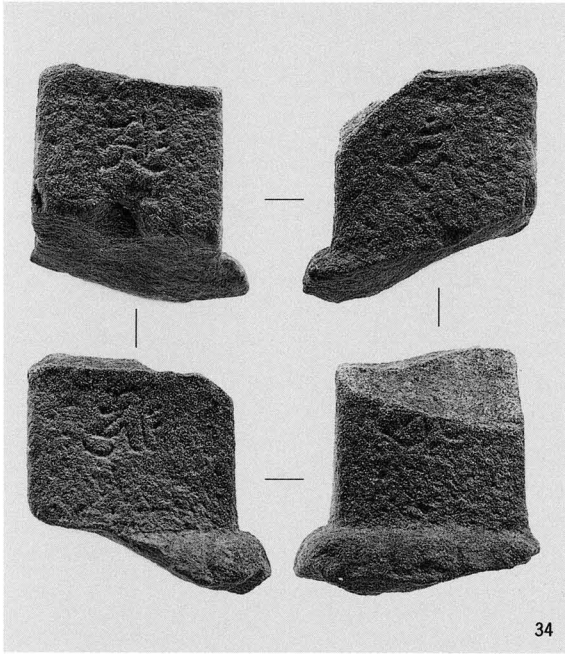


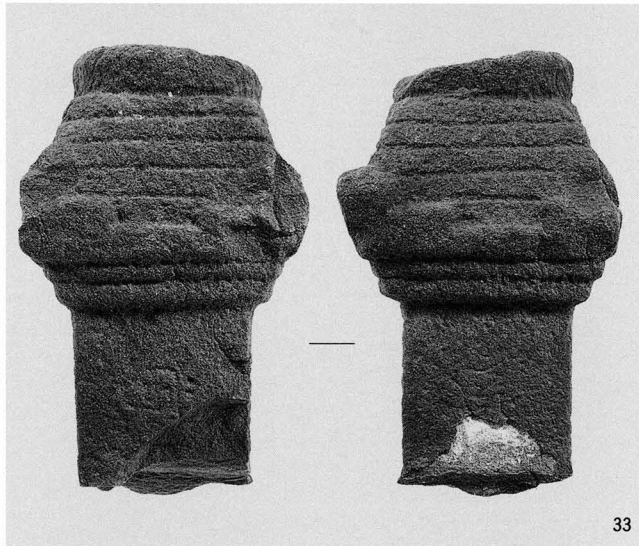


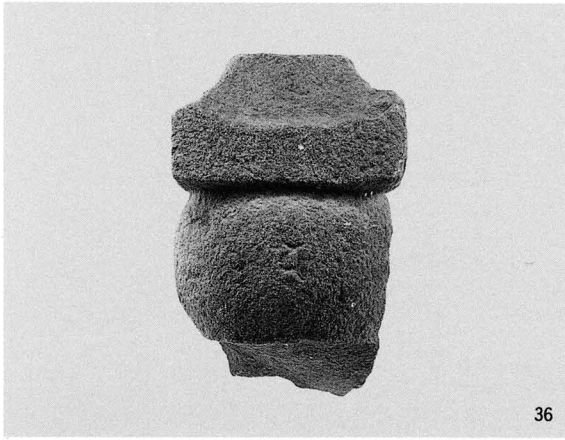
塚穴古墳（ＴＡＫ95－１）　墳丘周辺採集石造物（24・26～30）





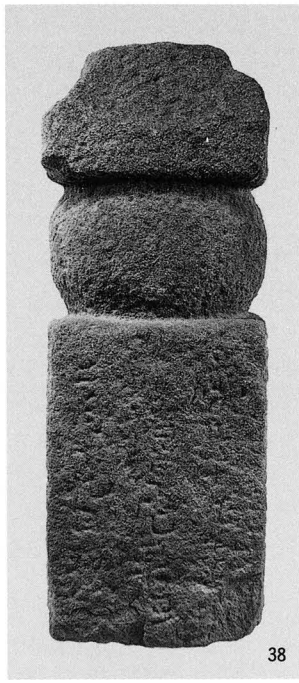






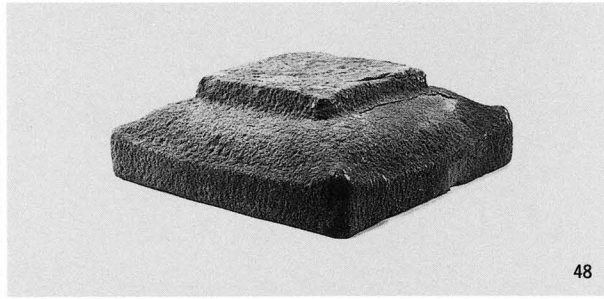
塚穴古墳（ＴＡＫ95－１）　墳丘周辺採集石造物（31～36）

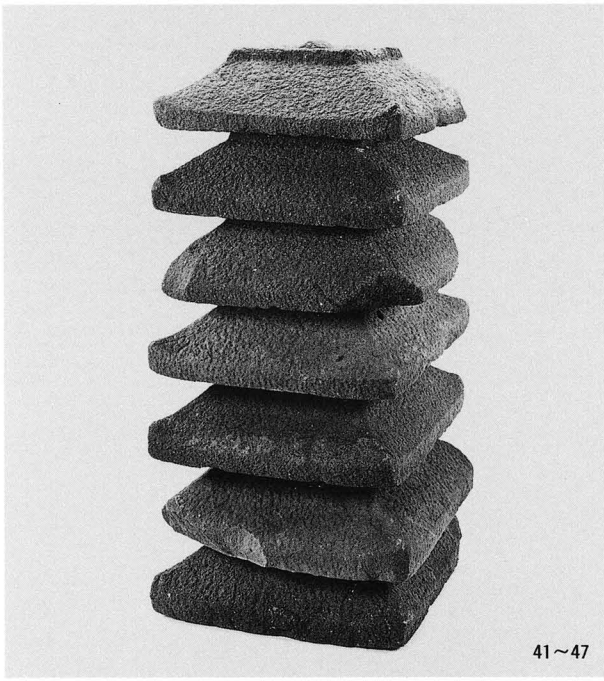
37

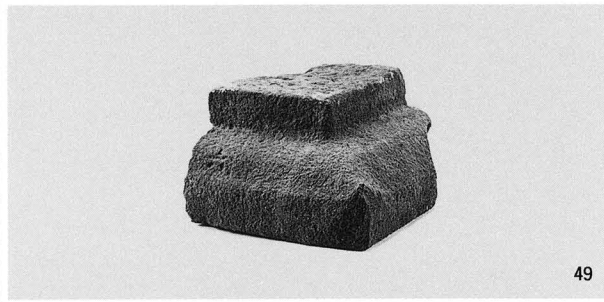

38

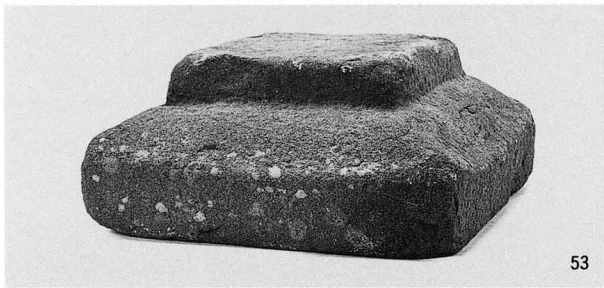
39

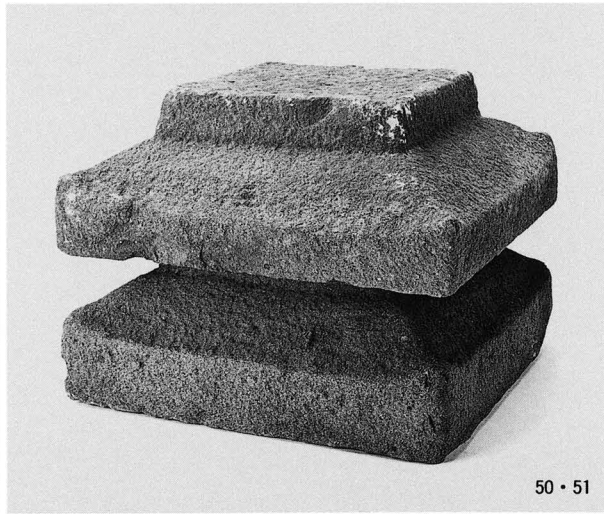
40


48


41～47


49

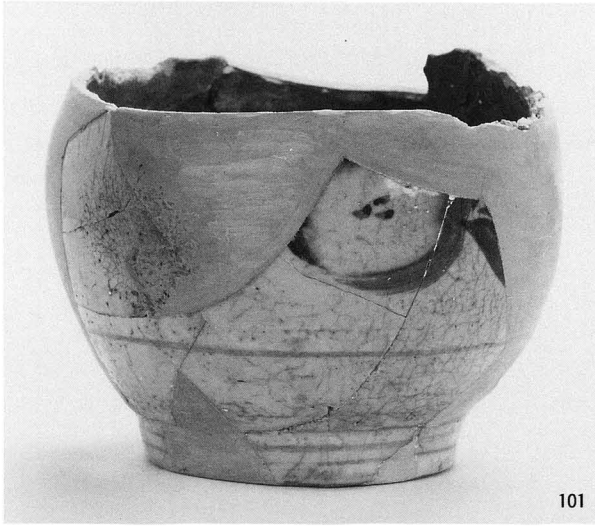

53


50・51

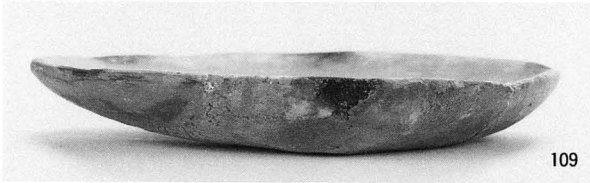
塚穴古墳（ＴＡＫ95－１）　墳丘周辺採集石造物（37～51・53）

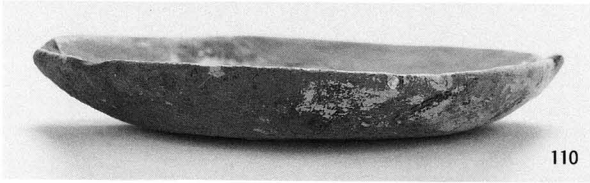
塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　ＳＬ１（54）、ＳＬ２（55・56）、ＳＬ３（57～60）

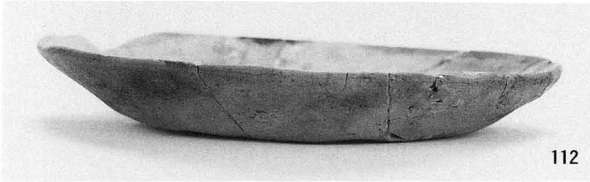
塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　ＳＬ４（61～64・66）、上層包含層（67～79・81～89）

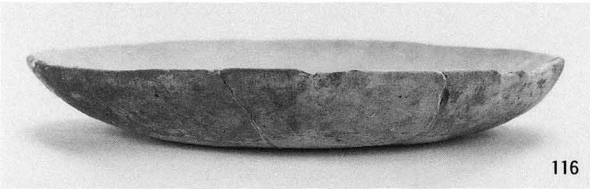


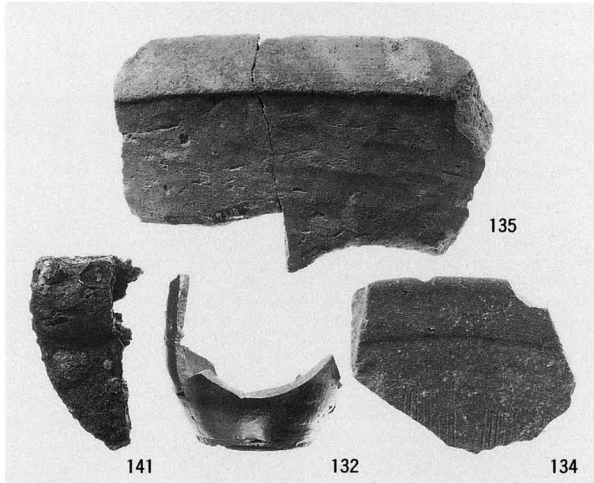
塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　上層包含層（90～102・105～108）

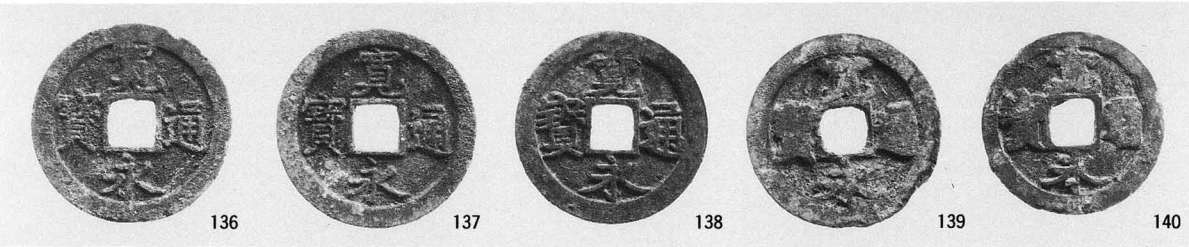


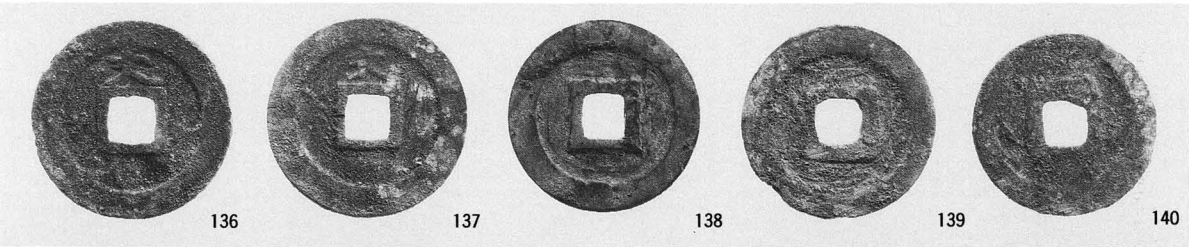




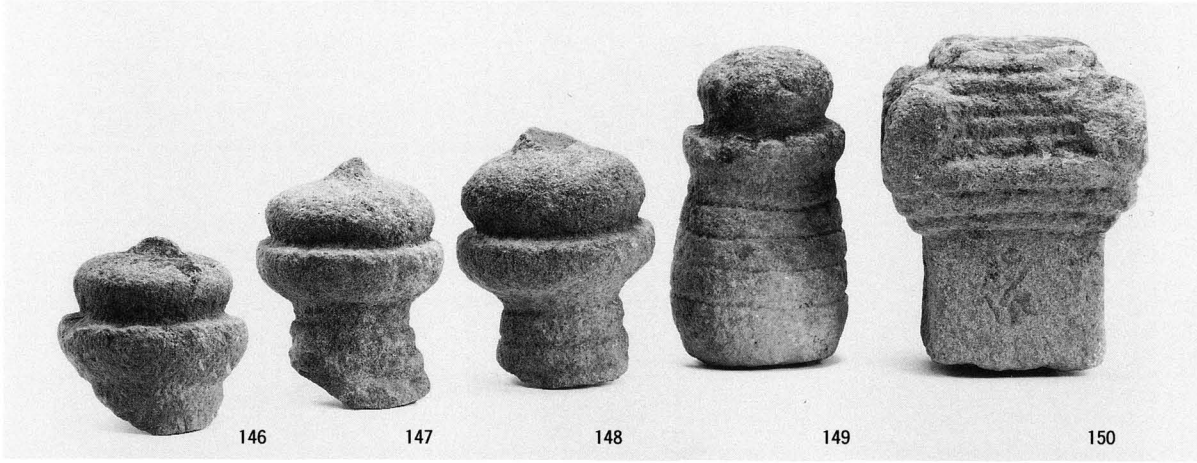








塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　下層包含層（109・110・112～114・116・122・131～141）



塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　石室内出土石造物（146～153・160・162・163）

165

164

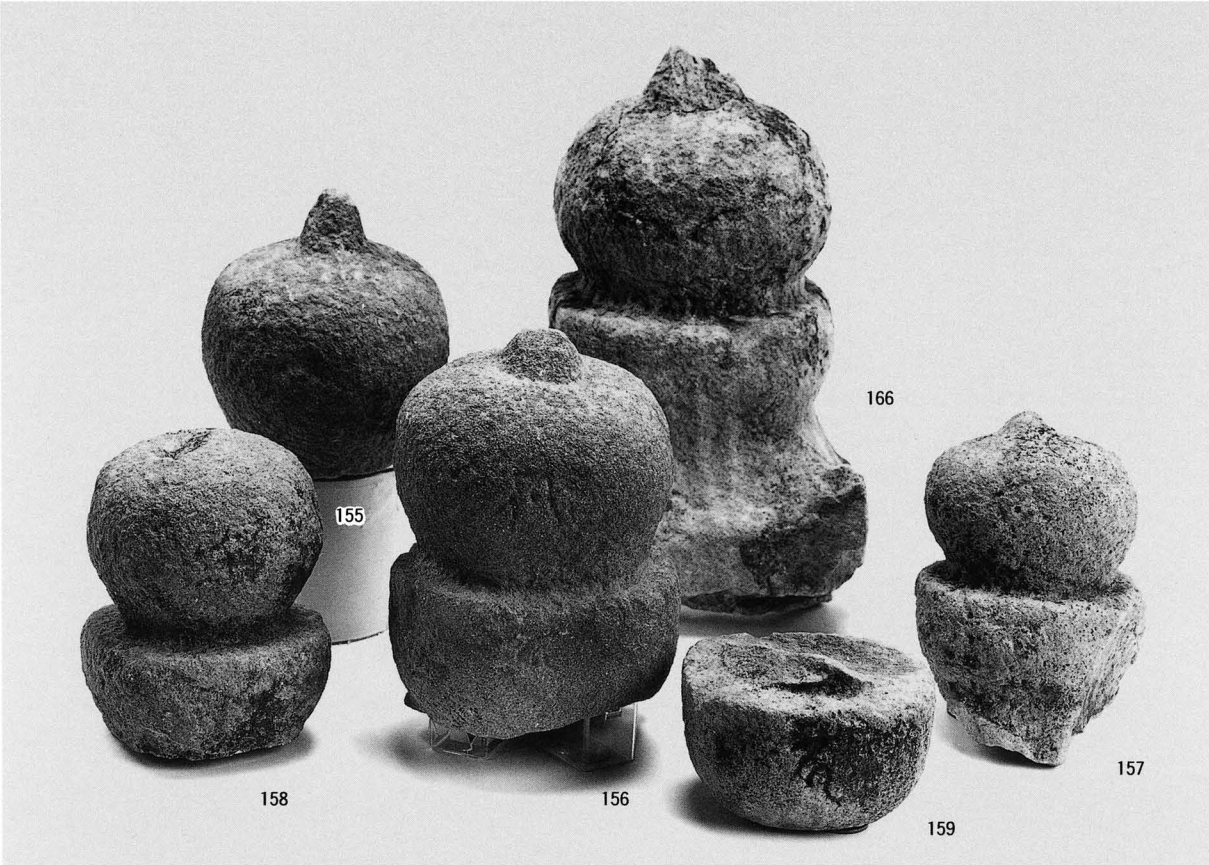
169

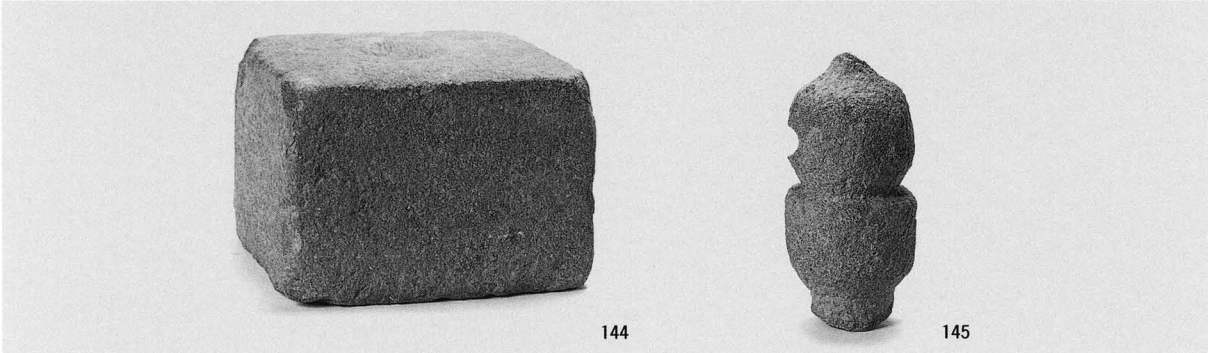
154

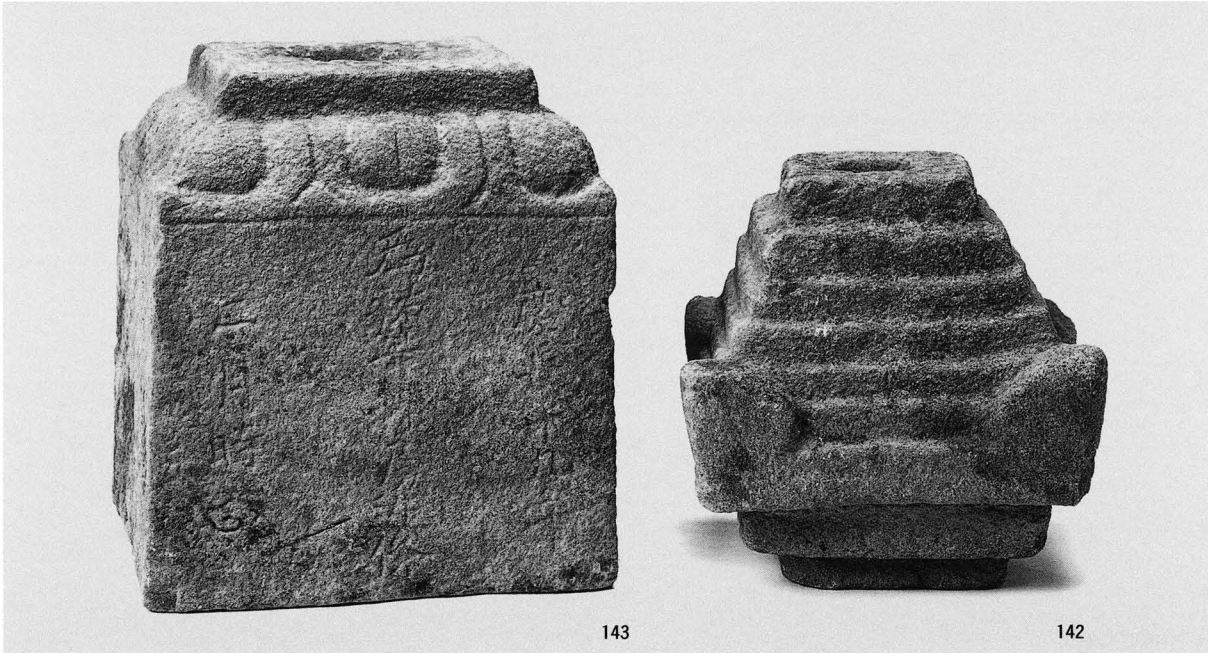
167

171

塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　石室内出土石造物（154・164・165・167・169・171）







塚穴古墳（ＴＡＫ96－１）　石室内出土石造物（142～145・155～159・166）

報　告　書　抄　録

ふりがな	うわはらいせき　つかあなこふん
書名	上原遺跡　塚穴古墳
副書名	河内長野市遺跡調査会報 XIX
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	XIX
編著者名	尾谷雅彦　鳥羽正剛　中尾智行
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586－8501 大阪府河内長野市原町396－3　TEL 0721-53-1111
発行年月日	1998年3月31日

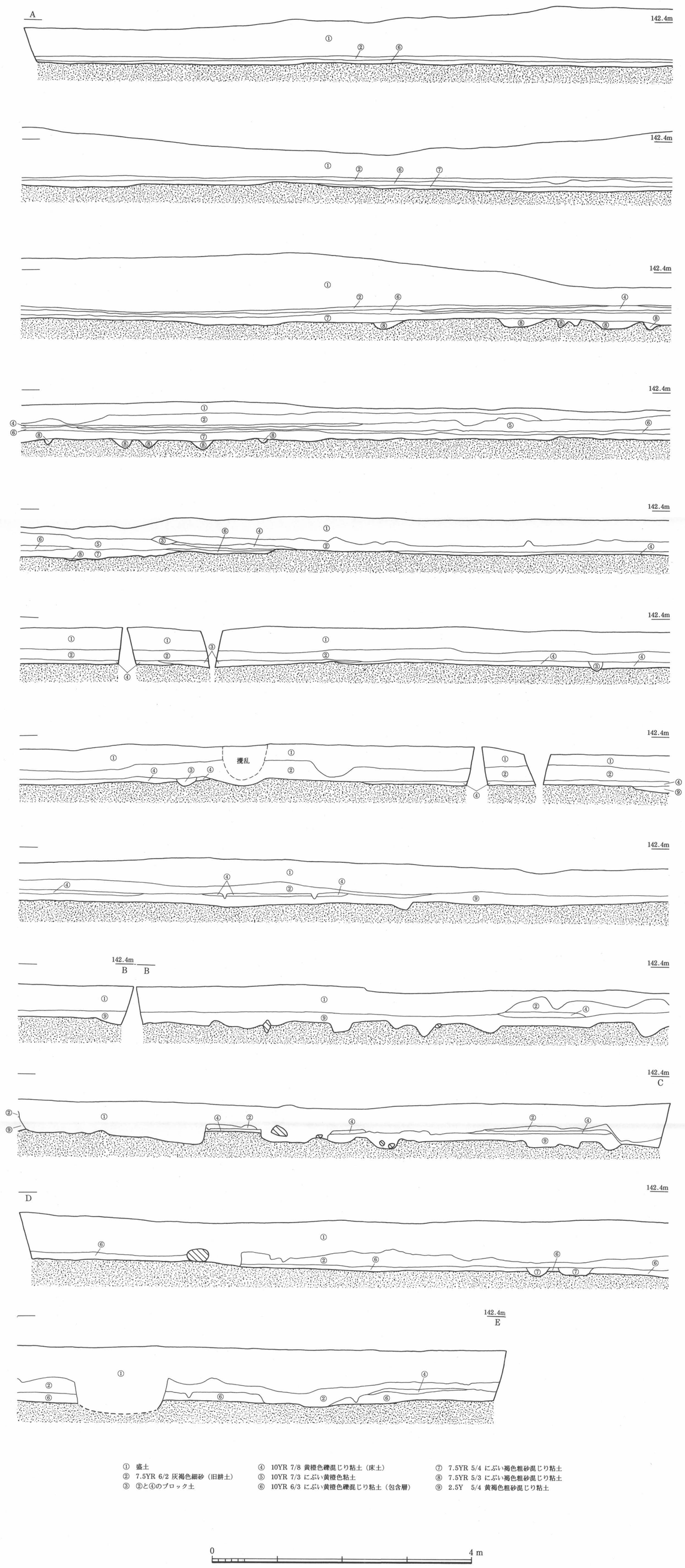
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
上原遺跡（うわはらいせき）	大阪府河内長野市上原町（おおさかふかわちながのし うわはらちょう）	27216	府53 河48	34° 26′ 32″	135° 33′ 16″	1997. 5.20 ～ 1997.12.25	3,080m²	区画整理に伴う宅地造成及び公園整備
塚穴古墳（つかあなこふん）	大阪府河内長野市上原町（おおさかふかわちながのし うわはらちょう）	27216	府11 河 9	34° 26′ 29″	135° 33′ 20″	1995. 4. 3 ～ 1996. 3.15 1996. 7. 1 ～ 1996. 8.30	約210m²	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上原遺跡	散布地	縄文時代後期		縄文土器	
		中世	ピット	土師質土器、瓦器	
塚穴古墳	古墳	近世	埋甕	土師質土器、陶磁器、銅銭 一石宝篋印塔 一石五輪塔 層塔	再構築された石室が基地として利用された

河内長野市遺跡調査会報XIX
上原遺跡　塚穴古墳

1998年３月31日発行

発　行　大阪府河内長野市原町396－３
河内長野市遺跡調査会
0721－53－1111
印　刷　㈱中島弘文堂印刷所



付図１　上原遺跡（UHR97-1）遺構全体図（1/200）及び土層断面実測図（1/50）